

欲情と微笑

新井孔央

〈登場人物〉

- ・ハルト(30) …この国の新たな王。〈白藤翔太〉
- ・アズサ(24) …隣国の女であり、ハルトの元へきた女性。〈藤田頼奈〉
- ・タクヤ(30) …ハルトの側近。〈和東一之介〉
- ・サツキ(27) …ハルトの妹。ハルトに兄弟以上の愛情を持っている。〈赤松怜音〉
- ・シヨウゴ(43) …国の男。〈田野倉雄太〉
- ・カレン(39) …シヨウゴの妻。〈大島夏紀〉
- ・ユズキ(21) …カレンらの娘。アズサの身の回りの世話をしている。〈草加陽子〉

〈舞台設定〉

異国風の宮廷内の、カレンとユズキに与えられている小さな部屋。

2面囲みの舞台になっており、向かって右手(上手側とする)側の壁は、それなりに綺麗に装飾されている。ドアがあり、廊下につながっている。出て少し行ったところに手洗い場と浴室はある。

向かって左側(下手側とする)の壁は、できたばかりのコンクリート打ちっばなしのような殺風景な壁である。質素な小さいドアがあり、それは隣の部屋につながっている。こちらの部屋は、シヨウゴが使っている部屋であった。そこから逆側の廊下に出られる。こちらの部屋は雨漏りがしているようで、聞こえるか聞こえないかの小さな音で、断続的に水滴が床に落ちる音が聞こえる。

上手側の壁に沿ってに小さなベッド(ユズキが使っている)が置いてある。またその横には小さな、サイドテーブルがある。また、下手側の壁に沿って少し大きめのベッド(カレンが使っている)が置いてある。こちらのベッドにはレースがかかっている。各々のベッドの脇にはランプがある。

部屋は小綺麗になっている。舞台の中央にはテーブル、一脚の椅子が置いてある。

〈設定〉

さして大きくもない国があった。その国は古くは統一された国であったが、現在は5つの国に分裂しており、各々が独立した政治機構を持っていた。それぞれの国は、その国の場所から、「東の国」「北の国」「西の国」「南の国」「中の国」といった。東の国は、かつては5国の中で最も強大な国であったが、現在は腐敗した政治や、他国との戦争で弱体化していた。国民は貧困に喘ぎ、国への不満も高まっていた。また中の国は、5国の中で唯一中立を貫いていた。

舞台は「東の国」である。東の国の前王は半年ほど前に崩御した。前王の葬式もままならない中、新しくハルトが国王につくことになった。ハルトは非常に墮落した生活を送っていた。彼は愛を求めていた。彼は国を顧みず、多くの女性と関係を持っていた。

半年ほど前に「中の国」からアズサという女がハルトの元へ来た。彼女は不思議な魅力を持っていた。ハルトは彼女に心を奪われた。彼女こそが、彼の愛を埋めてくれるのだと思っただ。しかしながら、彼女は感情をあらわに出すことはなかった。ハルトは、日に日に彼女に対して異常なほどの愛情を持つようになっていた。だがどんなに愛情を注いでも、彼女が笑うことはなかった。ハルトはそれを不満に思いながらも、彼女への愛と好奇心は高まってくる一方であった。

北の国は、前王が死んだことを好機に大軍を率いて東の国への攻撃を開始していた。国境の門に迫り、いよいよ東の国の滅亡も近いと誰しもが思っていた。しかしそれでも、ハルトは、アズサに夢中になり、自分は政治に興味を持たなかった。またそのタクヤ自身も、国の既婚女性であるカレンと乱れた関係にあり、まともに国に向き合おうとしなかった。

東の国では奇妙な事件が起こっていた。男性の集団自死が、数ヶ月前から起こっていたのだ。理由はわからないが、滅亡を目の前にした国では大きな事件であった。国では呪術的なものとも考えられていたし、国の滅亡を目の前にして自暴自棄となった集団によるものとも思われていた。もちろんのことながら、ハルトはそんな事件にも目をくれず、彼の視線は常にアズサの魅力に向いていたのである。

滅亡を目の前にした国を舞台に、乱れた性愛に塗れた人間の姿を描いた、4日間の物語。

〈本文〉

〈一場〉夏の終わり頃

異国風の室内。【東の国】の王宮内、端の方のカレンとユズキの親子に与えられている部屋。部屋に置かれた椅子の上には、黒いシャツが乱雑に置かれている。下手側のレースのかかったベッドの中にタクヤとカレンがいる。少し荒い吐息が聞こえる。少しして、半裸のタクヤがベッドから出てくる。ブランコの方へ向かう。

カレン 「・・・もう行くの?」

タクヤ 「・・・え?」

カレン 「もう行っちゃうのって、だから」

タクヤ 「行かないよ(笑)」(シャツを着ようとする)

カレン 「でも着ようとしてる」

タクヤ 「ん?」

カレン 「着ようとしてるじゃない。それ」

タクヤ 「そりゃ着るでしょだって(笑) いつまでもこんな、格好でき・・・(お腹をポンと叩く) 変でしょそんなの」

カレン 「変じゃないわ」

タクヤ 「変だよ変(笑)・・・(チラッと下手側の質素なドアを見て) うん・・・あ、だってユズちゃんだって、戻ってくるでしょ?」

カレン 「すぐには来ないわよ・・・」(レースを開けて、ベッドの隅に腰掛ける)

問

タクヤ 「・・・え、何やってんの?あの子今」

カレン 「ハルト様のところ」

タクヤ 「ああ・・・」

カレン 「だって、食事係の年寄りのバアさん達、少し前にみんな辞めさせられたでしょう?だから代わりに食事係やってるの」

タクヤ 「(何か考えている様子で)「・・・」

カレン 「(もう一度)「代わりに食事係やってるのよ」

タクヤ 「なんで2回も言うのよ(笑)」

カレン 「聞いてないみたいだから」

タクヤ 「(下品に笑って)「・・・まあだからね、まあ食い物作り行ったのに、だから逆に

食われちまうって、まあその、そうゆうことだろ？」

間

カレン 「・・・面白くないわ・・・」

タクヤ 「・・・へへ(笑)」

カレン 「料理だけは上手いの、あの子」

タクヤ 「だって(笑)・・・あんなバカ王子、何食っても一緒だろうに」

カレン 「王よ」

タクヤ 「え・・・ああ、そうだね・・・バカ王・・・へへ(笑)」

カレン 「それを支えるのがあなたの仕事じゃなくて？(笑)」

タクヤ 「・・・まあ、そうだけどさ・・・」(コンクリートの壁を触る)

間

カレン 「・・・キスしてよ」

タクヤ 「・・・は？」

カレン 「キス」

タクヤ 「・・・ん・・・なんか音がする」

カレン 「音？何も聞こえないけど・・・」

タクヤ 「ううん・・・音するな」(フラフラと歩く)

カレン 「・・・え、北？」(少しだけ慌てた様子で立つ)

タクヤ 「え？」

カレン 「夜襲かしら、北の」

タクヤ 「あ、いやそうゆうのじゃない。もっと静かなの」

カレン 「あ、そう・・・」

タクヤ 「うん・・・」

カレン 「・・・ああ。雨漏りよ」

タクヤ 「え？」

カレン 「あっちの部屋(下手側のドアの奥の部屋)の廊下の境目、雨漏りしてるから」

タクヤ 「そうなの？」

カレン 「うん、麻痺しちゃってる私。ずっと聞いているから」

タクヤ 「雨か、確かに・・・うん、雨漏りだわ、この音、へへ(笑)」

間(短め)

カレン 「・・・それで？キスしてくれるの？」

タクヤ (特に応答せず) 「・・・まあ、遅かれ早かれだけどな」

カレン 「え？」

タクヤ (妙に雄弁に) 「北の夜襲・夜襲じゃなくて、真っ向から来るのかもしれない。

寒いとこの馬は馬力が違うっていうから。ま、馬の問題だけじゃないんだろうけど。兵隊だって違うよ。あっちは蓄えなきやいけねえから体がデケエんだ」

カレン 「はあ」

タクヤ 「兵隊だけの話じゃないと思うけどね(苦笑)・・・そうしたらこの国もとうとうおしまいだよ」

カレン 「それはキスに関係あるの？」

問

タクヤ (話を逸らすように壁をなぞりながら) 「・・・立派な壁作っちゃって(笑)」

カレン 「あなたのおかげ」

タクヤ 「(笑)」

カレン 「あなたのせいとも言えるけど・・・だって彼は不本意なもの・・・」

タクヤ 「・・・今いる・・・？」

カレン 「知らない。だって壁があるもの」

タクヤ 「そっか・・・」(気になってドアの方へ)

カレン 「開けちゃダメよ。いるかもしれないんだから」

タクヤ 「や、旦那じゃなくてさ、雨・・・」

カレン 「ああ・・・まだだいぶ降ってるわ」

タクヤ 「外出てたの？」

カレン 「あなたが来る前に少し・・・あのね、赤っぼい月が出てたの」

タクヤ 「赤っぼい？」

カレン 「・・・ポヤーってね、浮かんてる。それにいつもより少しだけ大きかった気がする。空は雲に覆われてるのにそれだけ光ってるのよ。気持ち悪かった・・・」

タクヤ 「確かに不気味だね。なんか不吉なことが起こりそうなの・・・」

カレン 「そうなのよ・・・」

問

カレン 「・・・だからかもしれない。こんなにキスしたいのは」

タクヤ 「え？」

カレン 「不吉な月のせいだわ、ねえ」(タクヤを求める)

タクヤは苦笑しながら、渋々カレンに近づき彼女の顔に手を添え、キスしようとする。その時、上手側のドアが2回ノックされる。タクヤは急いで身を引く。

カレン (不機嫌そうに) 「・・・誰かしら」

タクヤ 「いや、俺アレだし」(カレンにドアを開けるように促す)

カレン 「ああ・・・」(渋々ドアの方へ向かう)

タクヤ (襟を執拗に直して、白々しく椅子に座る)

カレンがドアを開けると、王妃のアズサが立っている。ドレスに上着を羽織っている。彼女の両手は泥で汚れている。

カレン (驚いて跪き) 「アズサ様!？」

タクヤ (素早く立つ)

アズサ (冷たく部屋を見渡して) 「・・・どうも・・・ユズキさんは?」

カレン 「あ、今は・・・」

アズサ (軽く遮って) 「いや、いないなら別にいいのよ」

カレン 「すみません」

アズサ 「ううん、いいの」

カレン 「あ、あの、手・・・」

アズサ 「え?」

カレン 「手が、なんか汚れていらっしやる・・・?」

アズサ 「ええ・・・だから、拭くもの何か欲しくて」

タクヤ 「あ、拭くものなら浴室の方に。あ、俺・・・」(ドアの方へ向かう)

アズサ 「いいのよ別に」

タクヤ 「そう・・・(再びドアの方へ) あ、じゃあ俺ユズキ呼んできます」

アズサ 「ううん本当に気にしないで」

タクヤ 「そうですか・・・」

アズサ 「ええ・・・」

タクヤ 「あ、あの、ごめんなさい。アズサ様外行ってらしたのですか?」

アズサ 「・・・そうよ」

タクヤ 「あ、こんなこと言うのもアレですけど・・・あの、あんまり外とか行かない方がいいかもしれませんよ。暗いですし」

アズサ 「どうして？」

タクヤ 「・・・聞いてませんか？昨日の集団自殺のお話・・・」

アズサ 「聞いているわ」

タクヤ 「そうゆうの最近多いから、夜じゃお顔とかわからないかもしれませんし」

アズサ 「・・・ええ、気をつけるわ」

タクヤ 「はい、本当に」

アズサ 「それじゃあ・・・」(出ていく)

間

カレン 「驚いた・・・何？集団自殺って」

タクヤ 「知らないの？」

カレン 「うん」

タクヤ 「・・・なんか、最近よく起きててさ。昨日は南の門の裏手の崖で30人くらい、飛び降りて死んだよ・・・」

カレン 「・・・はあ」

タクヤ 「ピストルで顔打ち抜いているのもあって・・・でも、顔がみんな笑ってるの。いや、全員が全員顔がわかるわけじゃねえけどさ、気味悪くて」

カレン 「(少し怖がって)「顔って死体の？」」

タクヤ 「うん・・・」

間 (短め)

タクヤ 「それで、俺らも運んだりできねえからさ、上から土ぶっかけて埋めちゃうの(苦笑)」

カレン 「そうなのね・・・」

タクヤ 「・・・ま、こんな国じゃ死にたくなるのもわかるんだけどさ。北との戦争で税金ばっか増えるわけだし。そうじゃなくても徴兵されるわけだから・・・悪くない選択だよ」

間

カレン 「(アズサの出て行った方を見て)「・・・でも綺麗ね」

タクヤ 「え？」

カレン 「アズサ様。私吸い込まれちゃうかと思った」

タクヤ 「何それ（笑）」

カレン 「あんなに美しいんだもの・・本当に表情ひとつ動かさないのね」

タクヤ 「・・かわいそうなお姫様だからな・・」

カレン 「・・まあね・・」

タクヤ 「国が分裂してから一回も戦争なんてしない中の国からさ、こんな戦争ばっかの国に嫁がされて、しかもあんなバカ王に・・そりゃ彼女も笑わないよ・・」

カレン 「そうね・・」

タクヤ 「・・中の国も戦争がないつつつても残酷だよ・・でも、あれが普通の女だったらな・・へへ（下品に笑う）」

カレン 「やめなよ。誰が聞いているかわかんないわ」

タクヤ 「でも真実だよ、あんな綺麗なのにさ・・」

間（短め）

カレン 「・・でも娘が言ってたわ。お顔だけじゃないんだってよ、あの人の美しさの本当のところは・・」

タクヤ 「ん？」

カレン 「お背中ね刺青が入ってるんだって」

タクヤ 「刺青？」

カレン 「ええ・・それはものすごく美しくて、それこそ飲み込まれちゃうほどらしいのよ」

タクヤ 「えー本当？」

カレン 「もちろんお顔も美しいわ。でもね、刺青はそれ以上の魅力だって噂よ・・」

ハルト 「へえ・・でもそれはにわかには信じがたいな・・」

ユズキが上手側のドアから入ってくる。

カレン 「あ、ユズキ」

ユズキ 「戻ったよ。タクヤ様、いらしたんですか？」

タクヤ 「・・あ、うん・・」

カレン 「ねえ、あなた今日は一晩じゃなくって・・？」

ユズキ 「一晩？何それ？」

カレン 「え、いや・・」（タクヤの方を見る）

タクヤ (急な視線にたじろいて)「は・・・」

ユズキ 「何の話? いや別にいいのよ。いいんですよ、まだいらっしやっても」

タクヤ 「や、でも。俺はもう・・・」

ユズキ 「別に私気にしないし。でもここがお母さんと私の部屋だから。だから私はここに
戻らないとってそうゆうのですから」

タクヤ 「・・・いや全然・・・(苦笑)」

間

カレン 「・・・ハルト様は? 食事をしてきたんじゃないの?」

ユズキ 「してきたわ」

カレン 「随分早かったのね」

ユズキ 「ええ・・・でもまだあの人は食べてるんじゃないかしら?」(チラチラとドアの
方を見る)

カレン 「・・・え、どうゆうこと?」

ユズキ 「私出てきちゃったのよ、食事の途中で」

カレン 「え・・・?」

ユズキ 「あの人、ずっと心ここにあらずでモノを口に運んでるだけ。きっと私が出てき
たのも気づいてないわ(笑)」

カレン (釈然とせず)「・・・はあ」

ユズキ 「アズサ様がいないから魂が抜けちゃってるの・・・魂だけあの人を搜索して
るのね(笑)」

タクヤ 「あ、アズサ様ならさっき」

ユズキ 「あ、帰ってきたんですか? じゃあもう魂戻る(笑)」

カレン 「あなた探してたわよ」

ユズキ 「私を? え、なんでだろ・・・(笑)」(言いながらドアの方へ)

間

タクヤ 「何作ってきたの?」

ユズキ (振り返って)「あ、パスタですよ。ペンのパスタ」

タクヤ 「あ、いいね(笑)」

ユズキ (ドアの奥へ)「ねえ、どうぞ入ってください・・・」

サツキ (声だけ)「あ、ええ・・・」

上手側のドアから、王の妹、サツキが入ってくる。

カレン 「え、サツキ様!？」

タクヤ (同時) (小さく狼狽えて) 「は・・・」

サツキ 「・・・すみません、夜分遅くに」

カレン 「いや全然・・・」

ユズキ (カレンに) 「サツキ様が私にご相談があるって言うから。いいでしょう?」

カレン 「ええ、それは構わないけど」

サツキ (被って) 「え、タクヤさん・・・?」

タクヤ 「・・・」

ユズキ (サツキに) 「なんか人がいっぱいいて・・・(笑) ご相談、それでも構わない?そ

れにお母さんの方がその辺は詳しいわ」

サツキ (タクヤをチラッと見て) 「いや・・・」

タクヤ (同時に) (遮るように) 「あ、じゃあ俺、アズサ様のこと見てくる・・・」

カレン 「え、大丈夫ですよ、きつと」

タクヤ 「いや、タオル。わかりづらいかもしれないからだから、一応・・・」

ユズキ 「タオル?」

タクヤ 「さっきタオル探しにきたの・・・だから、ちょっと確認にね・・・」 (立って足早

に出て行こうとする)

カレン 「・・・じゃあ、私も・・・」

タクヤ 「や、いいよ・・・」

ユズキ (同時に) 「お母さんはいた方がいいわよ。(サツキに) ね?それでもいいですよ

ね?」

サツキ 「・・・ええ」

タクヤ 「うん、じゃあ俺は・・・(ドアの前で振り返り)・・・あ、なんかさ、あのペンネッ

てさ、なんか、神様の愛って感じるよね・・・へへ(笑)」

他 「・・・」

タクヤ 「・・・じゃあ・・・」

タクヤは出ていく。ドアが開けっ放しだ。

カレン 「・・・アガペーのことかしら？」

ユズキ 「何それ？」

カレン 「いいのよ(笑)・・・それでどうしたんですか？ご相談って」

サツキ 「・・・」

カレン 「あ、とりあえず座っていただいて」(椅子に促す)

サツキ 「ええ・・・」(座る)

ユズキ (下手側のベッドに座る)

カレン 「・・・それで・・・？」

サツキ 「・・・」

ユズキ 「私が言っていていいですか？言いづらいようでしたら」

サツキ 「・・・ええ」

ユズキ (深刻そうに)「・・・あのね、お腹に赤ちゃんがいらっしやるみたいなの」

カレン 「え？」

ユズキ 「私も昨日お聞きしたんですけど、もう4ヶ月でしたっけ？」

サツキ 「3ヶ月よ、多分・・・」

ユズキ 「そうなんですって」

カレン (あまり受け入れられていないが)「・・・はあ、そうですか・・・」

サツキ 「ええ・・・」

問

カレン 「・・・そうですか・・・でもそれはまあ、おめでたいことじゃないですか。あ、おめでとうございます」

サツキ 「・・・」

ユズキ 「・・・でもそれがあまり良くないことなの」

カレン 「え？」

ユズキ 「おめでたくないって言うのと違うけど・・・(サツキに)いやそんな・・・へへ(笑)」

サツキ 「いや・・・」

カレン 「・・・あ、順番のことですね？」

サツキ 「順番？」

カレン 「でもそれなら気にすることないですよ。子供ができたなら、男女っていうのは

そこに、だから、愛が自然に生まれるものですよ」

サツキ 「・・・愛・・・」

カレン 「いや、そりゃどの口が言ってるんだって話かもしれないですけどね。うちも逆だったんですよ。それにほら今は、物理的にも壁がね、できちゃってますけど・でもこの子(ユズキ)ができた時なんてのは、やっぱり大きな愛がね、ありましたから」

ユズキ (遮って)「そうじゃないのよ」

カレン 「え？」

ユズキ 「誰だかわからないのよ」

間(短め)

カレン 「・・・え、えっと、それは(どうゆうこと)」

ユズキ (遮って)「その男がね、誰だかわからないんですって」

カレン 「男？」

ユズキ 「父親よ・・・」

カレン (辿々しく)「え・・・でもだってそれは、サツキ様が、だから、その3ヶ月前に誰とその、そーゆうことを(誰としたかってことでわかると思うんだけど)」
サツキ (突然大きな声で)「ほんとにわからないのよ！」

間

カレン 「・・・申し訳ありません・・・」

サツキ 「・・・」

間(短め)

ユズキ 「・・・そう言ってるのよ・・・だから相談にね、いらしたの」
カレン (まだ釈然とせず)「うん・・・でもだってそれは・・・」

ユズキ (遮って)「だから、サツキ様が産むにしろ、その、そうじゃないとしてもちゃんとだから、そうゆう、ちゃんとした議論が必要でしょう？(サツキに)そうですよね？」

サツキ 「・・・ええ」

カレン 「えっと、それはハルト様はご存知で？」

サツキ 「いえ・・・」

カレン 「そうよね・・・そう・・・だから一番にユズキに・・・」

サツキ 「ええ・・・」

間

カレン (一旦落とし込み)「・・・とりあえず何でも話してみてください」

サツキ 「はい、ありがとう」

カレン 「どう力になるかわかりませんが。でもオナナのは色々ね・・・(笑)」

サツキ 「少し和んで」「心強い・・・(笑)」

ユズキ (吹き出してしまう)

上手側の方からハルトの声が聞こえる。気が動転して、子供のような様子

ハルト (呼びながら入ってきて) 「ユズキ！おい、ユズキ！」

ユズキ 「はい？」

カレン (同時に) 「あー！」(跪こうとしてベッドから落ちるがこける)

サツキ 「え・・・(カレンに駆け寄って) 大丈夫？」

カレン 「ええ、すみません」(体勢を戻し、床に跪く)

ハルト (ハアハア言いながら、部屋を見回している)

ユズキ 「ハルト様、もうお食事はお済みになりましたの？」

ハルト 「・・・アズサを知らないか？」

ユズキ 「・・・え、いや・・・」(カレンをチラッと見る)

ハルト (ユズキが曖昧なので) 「・・・アズサはどこにいるのかって聞いてるんだ」

ユズキ 「・・・あの、私は知りませんが、でも・・・あの、お食事は・・・？」

ハルト (遮って) 「食べた！・・・(イライラして) こんな時間になって・・・なあ・・・」

ユズキ 「今は知りません。夕方ごろにお一人で外出しましたけど・・・」

ハルト (遮って) 「今まで帰ってないのか!？」

ユズキ 「いや、それは・・・」

ハルト 「なんで俺に何も・・・(頭を掻きむしり) あああ・・・」

ユズキ 「・・・あの、ハルト様・・・」

ハルト (遮って急に) 「俺はもう寝る時間なんだぞ!・・・それなのにアズサ・・・アズサ

が・・・アズサ・・・」(呼吸荒く、部屋の中をウロウロとする)

ユズキ 「・・・ああ・・・」(立って、ハルトに近づきながらカレンの方を見る)

間 (短め)

カレン (恐る恐る) 「・・・あのハルト様。あのアズサ様はお帰りになっております」

ハルト 「は、本当か!？」

カレン 「はい・・・一度こちらのお部屋をお尋ねになって・・・(ユズキを庇うように) い

や、娘がまだ戻っていない時なのですが・・・

ハルト (カレンの肩を掴み)「どこにいる!？」

カレン 「それはわかりませんが・・・」

ハルト (カレンを突き飛ばして、出て行こうとする)「アズサ・・・アズサ・・・」

ユズキ 「ああ・・・」(すかさずカレンに近寄る)

サツキ (同時)「兄様!」

ハルト (カレンに)「おい、何をしてる?アズサの居場所を教えてください!」

カレン 「は・・・」

ハルト 「お前が案内しないとわからないだろ!？」

カレン 「あ、はい・・・」(立つ)

ハルトは小さくアズサを呼びながら出ていく。それにカレンはトボトボとついていく。

サツキ 「・・・大丈夫かしら?」

ユズキ 「いつものことじゃないですか・・・狂ってる・・・(苦笑)」

サツキ 「ううん違くてお母さん。平気かしら・・・」

間

ユズキ 「・・・え、あー・・・本当に思ってます?」

サツキ 「ん?」

ユズキ 「母のこと、心配してます?」

サツキ 「え、なんで?」

ユズキ 「あ、いいんです、してくれなくて。別に母はサツキ様が気にするような人間じゃないから(笑)」

サツキ 「ん、え、何?」

ユズキ 「・・・逆にハルト様のご心配じゃなくて?」

間(短め)

サツキ 「・・・心配よ。あんな風になっちゃって・・・薬物中毒みたいに」

ユズキ 「うん(笑)」

サツキ 「兄様が王について間もないのよ。大事な時期だわ・・・なのにお父様が亡くなったから、北の侵攻も激しくなって、国の人だって離れていってる・・・」

ユズキ 「ううん、そうじゃないんです、そうじゃ・・・私が言いたいのはつまり、あなた

の気持ちの部分であって」

サツキ 「ん？」

ユズキ (突然サツキに近づき、お腹に触り)「・・・ねえ、その子供、あの人の子供じゃないんですよね？」

サツキ (何かを感じる)「・・・は、そんなわけないでしょう？」

ユズキ 「流石にそうか・・・(笑)」

サツキ 「何を言い出すの・・・」

ユズキ 「・・・でもあの人に、だから、恋していますね・・・？」

サツキ 「は・・・」

ユズキ 「ええ、恋」

間 (短め)

サツキ 「恋？・・・ええ。兄様のことは好きよ、愛してる・・・それがどうかしたの？」

ユズキ 「どうって・・・(笑)」

サツキ (振り切るように遮って)「もちろんよ。国が不安定なんだから尚更・・・兄様のことは私がちゃんと深く愛さなくちゃって、そう思うわ」

ユズキ 「はあ・・・(笑)」

サツキ 「でもあなたの思うのとは違うとかもしれないけど・・・兄妹だもの。無条件な愛よ。私はそんな愛を兄様に捧げてるわ・・・」

ユズキ、突然わざとらしく大声で笑い出し、立って部屋をフラフラし出す。

ユズキ 「・・・バカにしてる？」

サツキ 「え？」

ユズキ 「なに『無条件の愛』って。舐めてるよね、私・・・あ、もうダメでいい？相談的に、断然先輩だし私」

サツキ (突然のことに動揺し)「何よ、ちょっと」

ユズキ (捲し立てるように)「私、子供3回墮したことがあるわ。あなたより年下なのに3回よ。4回かも。もう覚えてない」

サツキ (小さく)「そうなの・・・」

ユズキ 「兄弟同然だった幼馴染と違ってセックスしたわ・・・だって私エロい気持ちになるんだもの・・・！」

サツキ 「え、は、何を急にそんな・・・」

ユズキ (軽く遮って)「・・・だから、あなたのあの人への気持ちは、そうゆう、エロい、だから、欲望でしょう？恋をしてるのよ。何を勘違いしてるの・・・(笑)」

間 (短め)

ユズキ (サツキの手を取り変に寄り添って)「・・・でもいいのよ別に。男女の世界で、しかもこんな国だもの・・・兄妹だからって少しも恥ずかしくないわ」

サツキ (落ち着いて)「・・・だからそんなじゃないのよ。私はそんな汚くないわ」

ユズキ 「汚い？」

サツキ 「わからないと思うわ、こんな感覚は・・・可哀想かもしれないけど、あなたが言ってるのは、だからそう、全然浅いじゃない・・・」

ユズキ 「ほらやっぱりバカにしてる」

サツキ 「違うのよ。私の気持ちは汚くないもの。もっと深くて美しい愛情よ。そんな簡単なのは超越してるの・・・でも私は王の妹だし兄様だけじゃなく誰にだってそんな気持ちを持つてるわ、それが人間の本質だもの」

ユズキ (苛立って)「・・・それ、愛情の押し付けだかんね？」

サツキ 「は？」

ユズキ (語気強く)「そんなの強要しないで！」

サツキ 「強要なんてしてないじゃない(笑)」

ユズキ 「・・・じゃあ人間の本質がそれだっていうならその男も愛してるってわけ？」

サツキ (痛いところを突かれ)「え・・・」

ユズキ 「・・・愛してるんならこの話は終わりじゃない。ね？おしまいよ」

サツキ 「・・・いや」

ユズキ 「あのね・・・人間の本質は、憎しみとエロなのよ・・・だから私なんか相談して

てきたんでしょ？」

サツキ 「・・・」

ユズキ 「私にはわかる。あんたのあの人への目が、そーゆー女の目になってるのが。なのにあの人はエロい目で見えてくれなくて。挙げ句の果てにあなたは子供できてって・・・そういうことでしょ？」

間 (短め)

サツキ 「・・・あなたに相談したのが間違いだっただわ」(出て行こうとする)

ユズキ (サツキの背中に)「え？え、恨んでる？え、まさか私のことも恨んじやってる？」

でもごめんね、私のセックスは仕方ないからさ」

サツキ 「もういいわよ」(出て行こうとする)

ユズキ (その背中に) 「私、せっかくだいい話しようと思ったのにな・・・」

サツキ (足を止めて) 「・・・いい話？」

ユズキ 「あ、でもいいけど別にしなくても(笑)」

サツキ 「・・・兄様のこと？」

ユズキ 「へへ(笑)」

サツキ 「聞かせて」

間(短め)

ユズキ 「・・・だから・・・あなた、アズサ様のこと嫌いでしょう？」

サツキ 「え・・・」

ユズキ 「私も好きじゃないあの女・・・確かに綺麗だけど無表情で何考えてるかわかんないもの。それなのにハルト様は彼女ばっかで私にも手を出さない・・・そう、禁欲的になったわ・・・」

サツキ 「・・・」

ユズキ 「それにあの女が来てから国はもっとひどくなっただって思うの。そうじゃない？」

サツキ 「・・・思うわ」

サツキのセリフと被って下手側の壁の奥からハルトの怒鳴り声が聞こえる。

ハルト (声) 「おい！今何をしていた!？」

2人 「!？」

ハルト (声) 「おい、お前・・・!」

シヨウゴ (声) 「え、ハル(ト様・・・!?)」

サツキ 「兄様・・・？」

続いて、上手側のドアに何か体が当たりする音。続いて、カレンの叫び声。

ユズキ 「え、お母さん・・・？」(ドアの方へ近づいていく)

ハルト (声) 「だから何をしていたんだお前・・・!」

シヨウゴ (声) 「何って・・・」

ハルト (声) 「だから！今ここから、アズサ・・・」

ドアの奥からドタドタという音。何度もドアに大きなものが体当たりする音が聞こえる。その間、ユズキとサツキは動揺しており、一度大きく壁が叩かれた時に、サツキはビクッとしてよろけて、転倒する。お腹を守るサツキに、「大丈夫？」などと言い駆け寄るユズキ。

シヨウゴ (声) 「いや・・・」

ハルト (声) 「何をしてたんだ、アズサと！」

シヨウゴ (声) 「その、いや・・・」

ハルト (声) 「質問に答えろ！」(何か暴力を加える音)

シヨウゴ (声) (声にならないうめき声)

カレン (声) 「ハルト様やめてください！」

ハルト (声) 「うるさい！なんでだ！おい、殺すぞ！」

シヨウゴ (声) 「いやあの・・・」

ハルト (声) (徐々に泣いているような声) 「おい！答えろ！」(暴力的な音)

カレン (声) 「やめて！ねえ、あなた逃げて！」

ハルト (声) 「おい！お前、おい！殺す！」

カレン (声) 「早く！ねえ！逃げて！」

ハルト (声) 「おい！」

ドアが開き、シヨウゴが逃げるように四つん這いで出てくる。それからハルトがドタドタと入ってくる。少しだけ泣いている。その後ろから、半泣きのカレンも入ってくる。ハルトはシヨウゴに掴みかかる。

ハルト 「おい！シヨウゴ！何をしてたんだ！」

カレン 「ハルト様！」(ハルトを止めようとする)

ユズキ (ほぼ同時に) 「ちよっと！」(ハルトを止めようとする)

シヨウゴ 「・・・いや、何も・・・！」

ハルト 「何もってなんだ！アズサが・・・なんでだ！何をしてた！殺すぞ！」

シヨウゴ 「だから何も・・・！」

ハルトはショウゴを掴みながら、叫んでいる。

カレン 「ユズキ、誰か！」

ユズキ 「あ、うん！（サツキに）ねえ！」（ハルトを引き剥がすようにサツキに指示）
サツキ 「ああ・・・」（加勢しようとするが、どうしたらいいかわからずオドオド）

ユズキが上手のドアを開けると、タイミングよくタクヤが戻ってくる。手にタオルを持っており、ドアは開けっぱなし。

タクヤ 「え、何！？ハルト（様・・・？）」

ユズキ 「あ！あの・・・！」（何て説明すればわからない）

タクヤが入ってくるあたりで、ショウゴがハルトを蹴り飛ばし、二人は離れる。
ハルトはその場にしゃがみ込み、全員息が上がっている。

ショウゴ （自分が蹴り飛ばした状況を理解して土下座し）「ああ・・・申し訳ございません」
タクヤ 「・・・何が起こってたの・・・？」

問

タクヤ 「ねえ、ハルト様・・・？」

ハルト （ハアハア）「・・・」

問

タクヤ （周りを見渡し）「・・・いや、別に誰でもいいんだけど・・・」

他 「・・・」

問

ハルト （もう半べそで、子供のように）「・・・アズサが・・・アズサがー・・・」

タクヤ （ハルトに近づき）「え、アズサ様が・・・？」

ハルト 「・・・アズサがさ、こいつの部屋にいたんだよ・・・！」

タクヤ 「え？」

ハルト 「こいつの部屋に二人でいてさ、こいつの部屋に・・・」

タクヤ 「は・・・本当ですか？」

カレン （ハルトの代わりに）「・・・はい、ハルト様と探していたんですが、旦那の部屋

から出てきたのが見えたんです、アズサ様が」

タクヤ (ハルトに)「は・・あの、実は私も探していたのですが、どこにもいらっしや
ら(なくて・・・)」

ハルト (遮って)「だから、だからこいつが連れ込んでたんだろ!(シヨウゴに)おい!
だから何をしていた!タクヤ、ピストルを!」(再び掴みかかろうとする)

タクヤ (タオルを放り、ハルトを止めて)「いけません、ハルト様!」

ハルト 「だってさ、タクヤ、だってこいつ・・」(もう何言ってるかわからない)

沈黙。

ユズキはハルトの情けない姿に笑いを堪えながら、サツキと目を合わせている。

タクヤ (シヨウゴに)「おい、お前何をしていた?」

シヨウゴ 「は・・いや・」(オドオドと)

タクヤ (大きな声で蹴り付けて)「おい!」

シヨウゴ (ビクツとして)「はい!・・あ、あの、恐れながら申し上げますが、あの、中
の国のことを、あの、姫様にお伺いして・・!」

タクヤ 「中の国?」

シヨウゴ (取り繕うように)「ええ。も、申し上げにくいのですが、北の国はもう国境を
落とす勢いです。もう2、3日のうちだとも聞いております。で、ですから、中
の国、姫様の国にお力添えいただけないか、あの、ご相談をさせていただいてい
たのです」

タクヤ 「なんでお前がそんなことを気にする必要がある!」

シヨウゴ 「私は、私は、兵五千人を抱えております。無闇な戦争で、兵を失うわけにはい
かないのです。その責任があります。中の国が加勢したとなれば、北の国への牽
制にもなると考え、ですから・・」

タクヤ (遮って)「中の国は長く中立国なんだ。加勢などあり得ないだろう!」

シヨウゴ 「で、ですから、姫様に取りついでいただければ、それもあり得ないことではな
いと思ひ・・しかし勝手な行動をしたこと、申し訳ありません・」(土下座)

問(短め)

タクヤ 「それはお前の仕事ではない。我々がそのような(話は・・)」

ハルト (遮って)「小さく不貞腐れたように」・・・「かっただか?」

タクヤ 「え？」

ハルト 「・・・笑わなかったか？アズサは」

タクヤ 「は・・・？」

一瞬の沈黙。一同急な質問に驚く。タクヤは訳がわからず、なんとなくカレンとユズキと顔を見合わず。

シヨウゴ 「・・・え、ええ。一切笑っておりません」

ハルト 「本当か？」

シヨウゴ 「・・・ええ、誓って・・・」

ハルト 「・・・本当に・・・何もしないんだ・・・」

シヨウゴ 「はい・・・」

上手側のドアからアズサが入ってくる。

アズサ 「どうかしましたの？」

他 「!？」

アズサ 「大きな声が出たから・・・あら、皆さんお揃いで・・・」

シヨウゴ (血相を変えて) 「あ、姫様！」

ハルト (同時に) (アズサに突進するように、彼女の肩を掴み) 「アズサ！」

アズサ 「？」

ハルト 「アズサ、お前どこに行ってたんだ！」

アズサ 「痛いわ・・・」

ハルト 「ああ・・・」(アズサの肩を離す)

アズサ 「夜のお散歩をしていたのよ。東の国はまだ知らないところがたくさんあるから・・・」

問

アズサ (今だに土下座しているシヨウゴを見て) 「何をしていたの？こんな大勢で」

タクヤ 「・・・いや・・・」

ハルト (遮って) 「いいんだ、いいだよそんなこと・・・」

アズサ 「そう・・・」

ハルトは突然アズサに抱きつく。

アズサ (特に抵抗をすることもなく) 「ハルト様？」

ハルト 「アズサ・アズサ・俺のアズサ・」

そのままハルトはアズサを下手側のベッドの上に押し倒す。そして、アズサの羽織物を脱がせ、ドレスを脱がそうとする。他は何も言えず、それをみている。

ハルト (薬物中毒者のようにアズサの背中をまさぐって) 「なあ、アズサ見せてくれよ、

アズサ・祈らせてくれよ・」

アズサ (ハルトの手を止めて) 「やめて、皆さん見てるわ・」

ハルト 「アズサ・どこにも行かないでくれよ・」

アズサ 「行かないわよ・」 (二人は抱き合っている)

間

ユズキ (シヨウゴに) 「パパ、大丈夫・？」 (手を出す)

シヨウゴ (ユズキをしっかりと見て、わざとらしく無視して立ち上がる) 「・・・」 (ユズキらと距離を取る)

ユズキ 「え・・・？」

間 (短め)

サツキ (ユズキに) 「ねえ・・・」

ユズキ 「ああ・・・」 (アズサとハルトの方に視線を移し、軽く舌打ち)

間 (短め)

ユズキ 「行こ・・・」

ユズキはサツキの手を引いて上手のドアから出ていく。大きな音を立ててドアを閉める。
沈黙。

タクヤ (そっと下手のドアから出て行こうとする)

カレン (それに気づき) 「・・・え、どこへ？」

タクヤ 「え、あ、いや、その赤い月？気になってさ・・・」

音楽が流れて、暗転。

〈2場〉翌日。夜。

ハルトが上手側のベッドに座っている。ユズキがフラフラとしている。

ユズキ 「・・・ねえ、ハルト様聞いてます?」

ハルト (虚な目)「・・・」

ユズキ (ため息をつく)

間(短め)

ユズキ (隣に座り、ハルトの頬を撫で)「・・・だからさ、おっぱい、触ってください」

ハルト 「・・・だからなんで・・・」

ユズキ 「いいから。何回も触ってきたおっぱいでしょう?だからほら、ね?」(ハルトの手を取る)

ハルト (その手を振り払う)

ユズキ 「どうして?前は一生懸命揉んでたのに。ね、そうでしたよね?」

ハルト 「・・・嫌なんだよ・・・」

ユズキ 「嫌なわけないわ。あんなに触ってたのに・・・」

間

ユズキ 「・・・じゃあいいわ、練習しましょ(立って、下手側のベッドの上のクッションを取って、ハルトに渡す)それ揉んでください」

ハルト (受け取ったクッションを投げ捨て、立って上手のドアの方へ)

ユズキ 「どこいくんですか?」

ハルト 「・・・トイレ」

ユズキ 「さっきも行きましたよ、今さっき。何?ウンコですか?」

ハルト (イライラしてきて)「は?」

ユズキ 「下痢?それならいいですけど。でも私ついて行きますね」

ハルト 「来なくていい」

ユズキ 「逃げるじゃないですか!逃げようとしてますよね?」

ハルト 「・・・」(出ていくのをやめ、ベッドの方へ)

ユズキ 「え、行かないの?早く行きましょよ(ハルトの手を引いて)下痢でしょ?早

くしないと漏れちゃいますよ。先言っときますけど、嫌ですから私そうゆう(世話話・・・)」

ハルト (キレて)「うるさいな!」

ユズキ (急だったのでビクツとして)「・・・」

問

ユズキ 「お部屋戻りたいなら触ってからにして、おっぱい。(手を広げて) はい、どうぞ」

ハルト 「だから触らないって言ってるだろ」

ユズキ 「逆になんで触らないんですか? 逃げるし・・・え、あ、じゃあ脱ぐ? 脱いだ方が触りやすい?」(服を脱ごうとする)

ハルト (妙に恐れて止めて)「やめろ! 俺はもう触らないんだ!」

問

ユズキ 「・・・どうしてそんなに禁欲的なのか?」

ハルト 「・・・」

ユズキ 「いつも私を抱いてたのに急にしなくなった。私は呼ばれてただご飯作るだけになった。これはどうゆうことですか?」

ハルト 「・・・興味がなくなった・・・」

ユズキ 「興味? 興味ってなに? セックスに興味なくなったってこと?」

ハルト 「そうだ、しつこいぞ」(出て行こうとする)

ユズキ (手を掴んで止めて)(懇願するふりで)「待って!・・・一回でいいの。もう一回でいいから私を抱いて・・・お願いだから・・・」

ハルト 「やめろ、離せ!」

ユズキ 「・・・アズサ様が来たからでしょ」

ハルト 「あ?」

ユズキ 「それまでセックスさせてくれとか、愛してるだとかテキトーなこと何回も言っていた。あの人がこの国に来てからよ。禁欲的になって、あの人がっかりで、この国の戦争にだって目を向けなくなった・・・ね? 全部あの人のせいなんですよ」

ハルト 「お前に関係ないだろ」

ユズキ 「それに昨日見えますから! あの人の背中中の刺青を食ってるの。そんな高尚ぶってたってあなたのエロの部分が残ってて、我慢してるの、私知ってますから!」

問

ハルト (少しユズキから離れて)「……あれは、そうじゃない……」

ユズキ 「……は？」

ハルト 「あれは……本当の、愛の世界の、祈りだ……」(宗教的な語り口で)

ユズキ (少し怖い)「……愛ってなによ……」

ハルト 「アズサの愛は、そんな欲望を超えた高みにいるんだ……滅亡していくこの国で、あいつは俺の苦しみを救ってくれる……」

ユズキ 「……滅亡ってあなた王でしよう？」

ハルト 「……あいつの刺青は、俺に新しい愛の世界を教えた……だから俺もあいつだけを愛しているんだ……」(話しながらユズキから顔を背ける)

ユズキはセリフを遮るようにハルトの強く腕を引いて、そのままベッドに押し倒す。

ハルト 「!？」

ユズキ 「ねえ意味わかんないから！愛とかゴチャゴチャいいから私を抱けって言ってるの！」

ハルト (押し返そうとするがうまく行かず)「やめろ……!」

ユズキ 「おっぱい触って！ねえ、ほら抱け！抱け！」(ハルトの腕を自分の胸へ)

ハルト (抵抗して)「離せ……」

ユズキ 「変よ！愛とかキモいから！キモいこと言ってるから！おっぱい触りなよ！ほら！触れ！」

ユズキとハルトがベッドの上で攻防している。少しして、カレンが上手側から入ってくる。

カレン 「……え？」

2人 (気づかず、攻防している)

カレン (覗き込んで)「え、ハルト様!?え、あ……キヤー!キヤー!なんで!え、なに、え!キヤー!キヤー!」(取り乱して騒ぎ出す)

ユズキ 「お母さん!？」

カレン 「何やってるの!?え、ハルト様……え、キヤー!」

ユズキ 「お母さんうるさいわ!」

ハルト (ユズキがカレンの方に向いた隙に、立って出て行こうとする)

ユズキ 「ハルト様待って！」

ハルト (無視して足早に出ていく。ドアが開けっ放し)

間

カレン 「・・・あなた、何をしたの・・・？」

ユズキは声を上げて笑う。少しして上手側のサツキがドアから顔を出す。

ユズキ 「もういいわよ・・・」

サツキ (部屋に入ってくる)

カレン (小さく)「え・・・サツキ様・・・？」

ユズキ (カレンは無視してサツキに)「・・・完全に失敗よ・・・全く触らないし、本当に

禁欲的・・・」

サツキ 「うん・・・」

ユズキ 「でもあの女のせいってことはわかったわ。まるで信者ね」

サツキ 「ねえ、あそこまでする必要あった？」

ユズキ 「仕方ないじゃない。作戦ではもっと早い予定だったのよ」

サツキ 「でも押し倒すなんて私聞いて(なかったから・・・)」

ユズキ (遮って)「それは恨みっこなしって言ったはずよ・・・あ、じゃあ明日はあな

たがやりなさい」

サツキ 「明日もやるの？」

ユズキ 「そりゃそうよ(笑)」

カレン (ビクビクして)「ねえ、私全くわからないんだけど・・・」

ユズキ 「ああ・・・(サツキに目配して)・・・あのね・・・ハルト様を改造するのよ・・・」

カレン 「・・・ん？」

ユズキ 「だから、ハルト様のエロさを取り戻す計画・・・(サツキに)ね？」

カレン 「え、は・・・」(訳がわからずサツキの方を見る)

サツキ 「いや、だって(ユズキが)やろうって言うから・・・」

ユズキ 「あの女のせいでもうすっかり禁欲的になんだから。でも我慢しててハルト様自

身も狂ってるの。さっきなんて国の事も考えてないみたいだった」

カレン (ユズキのセリフは聞いてない)「でも、ハルト様に手をあげるなんて・・・ああ・・・」

(動転して嘆いている)

ユズキ 「私はただ欲望を教えただけ・・・それにこれは新しいの恋のためなんだから」
カレン 「恋？」

ユズキ 「この人（サツキ）が、ハルト様にエロくなって欲しいっていうから（笑）」

サツキ 「そんなこと言っていないじゃない」

カレン 「・・・とりあえず、私謝ってこなきゃ・・・お父さんは？」（上手の方へ）

ユズキ 「いないわよ」

カレン （焦ってイライラして）「もう、なんでよ・・・（下手の方へ行って、ユズキに）

ほら行くわよ」

ユズキ 「行くなら勝手に行けば？」

カレン （ユズキを少し睨んでから）「・・・ああ、もう・・・」

カレンは焦って足早に上手側から出ていく。

ユズキ、大きなため息をついてベッドに腰掛ける。

ユズキ （ラフに）「エロくなる薬でもあればいいのにね」

サツキ 「・・・ねえ、なんの音・・・？」

ユズキ 「雨漏りでしょう？」

サツキ 「え？」

ユズキ 「隣の部屋、雨漏りしてたじゃない」

サツキ 「ああ・・・」

ユズキ 「でもずっと止まないもの雨。私は麻痺しちゃった」

間

ユズキ 「・・・私ね、こうやって色んなものが麻痺してくのが怖いよ。全部空虚に感じるでしょう？北の国が来るとか、戦争で何人死んだとか、現実って感じじゃなくなってくもの」

サツキ 「ああ・・・」（はっきりと聞こえない雨漏りの音を聞いている）

ユズキ 「だから私エロいことしたいのかもしれない・・・欲望の中にいればだって、現実のあったかさを感じられるでしょう？その間麻痺が解かれるみたいに」

サツキ 「どうゆうこと？」

ユズキ 「こんな国だって、現実なことは変わらないから・・・目を背けたくないのよ私。

それが私が生きてる意味ってことだもの」

問

ユズキ 「・・・あら、しんみりさせちゃったわ(笑) 雨漏り聞こうとしたから」

サツキ 「ううん。わからなくもないわよ」

ユズキ 「そう。雷とかは大丈夫かしら」

サツキ 「大丈夫よ、風はないみたい。お外出てないからわからないけど」

問

サツキ 「でも兄様が言ってたのもよくわかるわ。私たちを救ってくれる新しい愛って・・・」

ユズキ 「・・・あの女の受け売りじゃない(笑)」

サツキ 「神様みたいなこと言ってたわ・・・」

ユズキ 「それじゃ幸せにならないわよ。あの人だって口ではそう言うけど、苦しそう

よ・・・壊れちゃいそうじゃない」

サツキ 「そうだけど・・・でもさ・・・」

ユズキ 「でもさ？」

サツキ 「私にはわからない、どちらが正しいかなんて・・・でも禁欲的なのも素晴らしい

と思った。誠実なもの・・・」

ユズキ 「別に好きにしたらいいけど。でもしたらあの人の愛を独り占めするのは一生

無理ね」

サツキ 「・・・」

問

サツキ (無理やり話を変えて) (少し深刻な感じ) 「・・・そういえば、さっきアズサ様が

笑ってたの・・・」

ユズキ 「え・・・?見たの?」

サツキ 「ううん、声だけ・・・でもすぐおっきい声で笑ってた」

ユズキ 「そんなはずないわ。あの人が笑うなんて」

サツキ 「でも絶対あの人の声よ。私廊下を歩いてたら、外で聞こえたの」

ユズキ 「え・・・ほんとにあの女?」

サツキ 「本当よ・・・」

上手側のドアがノックされる。ユズキがドアを開けにいくと、そこにはタクヤがいる。イチゴが盛ってあるガラス製の脚付きのコンポート皿を持ってくる。

ユズキ 「あ、タクヤ様」

タクヤ 「おお・・(部屋を見回して) あれ・・カレンは？」

ユズキ 「さっき出て行きました」

タクヤ 「あ、そっか・・イチゴ持ってきたんだけど」(中に入り、テーブルの上に皿を置く。チラッとサツキを見る)

ユズキ 「お母さんと食べようと思って？」

タクヤ 「え、うん。もらったんだけど、美味しいんだよ」(一つ食べる)

ユズキ 「そうですか・・(一つ食べて) 美味しいわ・・」

タクヤ 「今日巡回中にもらってさ、思ったより甘いから。へへ(笑) だからちょっとサ
ービスしちゃったよね」

サツキ 「(悪態をつくように)「・・随分腐ってるのね」

タクヤ 「え、(無理に笑って)へへ・・食べます？はい」(イチゴを一つ渡す)

サツキ 「(タクヤを睨みながら食べる)

タクヤ 「うまいでしょ？」

サツキ 「・・甘いわ・・」

誰も何も話さない沈黙。

タクヤ 「(イチゴを一つ取り上げて)「・・イチゴってさ、エロいと思わない？」

ユズキ 「は？(笑)」

タクヤ 「全身に種くっつけてるんだから、ほら(変にユズキとサツキに見せて)こいつ
がオスなら変態だよな・・へへ(笑)」

ユズキ 「(タクヤの持つイチゴをまじまじと見て)「・・気持ち悪いこと考えますね」

タクヤ 「性欲が溢れ出しちゃってる(笑)」

サツキ 「それが果実なのよ」

タクヤ 「え？」

サツキ 「本当はその種みたいになつぶ一つ一つが果実って言われているのよ」

タクヤ 「へえ・・果実がこんなに・・(女性を見るような目でイチゴを眺め、粒々を一
つ一つむしって口に入れてみる)それはそれでエロいな・・(笑)」

ユズキ 「ねえ、コーヒー飲むと眠れなくなります？」

タクヤ 「え、俺？俺は別にそんなことないけど」

ユズキ 「そうですか（サツキに）あなたは？」
サツキ 「私も平気」
ユズキ 「そう、じゃあ淹れてくる」（出ていく）

二人の気まずい空間。タクヤはサツキに何か話そうと近づこうとする。

ユズキ （戻ってくる）

タクヤ 「！」

ユズキ 「クリームは必要ですか？」

タクヤ 「あ、お願いしたい」

サツキ （同時に）「平気よ」

ユズキ 「（笑）・・・わかりました」（出ていく）

沈黙。もう一粒、タクヤはイチゴを半分だけ食べる。

タクヤ （半分のイチゴを見ながら）「・・・コレと同じくらい赤い月が出てるんだよ」

サツキ （睨んで）「・・・なんの話よ」

タクヤ 「ずっと真上の空に浮かんでる、赤い月が・・・」

サツキ 「夕焼けじゃなくって？」

タクヤ 「違うよ。三日月」

サツキ 「・・・私今日外出てないからわからないわ」

タクヤ 「昨日も出てた」

サツキ （食い気味で）「昨日も」

タクヤ 「そう・・・じっと見るととき、女の目が浮き上がってくるのね。絵本の月みたい
に。それが赤いから気色悪いんだ。でもそれがまた美味しそうなんだな・・・（笑）」
（もう半分も食べる）

サツキ 「ねえ・・・ちようどいいから少し話しましょ」

タクヤ （無視して）「あの月、俺昔どっかで見たことあると氣したんだけどさ、王妃様
が死んだ時だっと思って。その時も、散歩してて見たんだよ」

サツキ 「王妃ってお母様のこと？」

タクヤ 「そう、こんな話して悪いけど。でも5年くらい前か・・・早えよな・・・」

サツキ 「やめて、そんな前の話」

タクヤ 「へへ・・・」(そつとサツキの隣に座る)

サツキ 「・・・」

タクヤ 「・・・キス、しようか・・・」(サツキの肩に手を置く)

サツキ (その手を払う)

タクヤ (サツキの手を取り、手の甲にキスをし、そして口にキスをしようとする)

下手側のドアが開き、そこにはアズサが立っている。

タクヤ 「!？」

アズサ 「・・・あら、二人しかいないの？」

タクヤ (少し狼狽えるが) 「え、ああ、はい・・・」

アズサ 「そう・・・ごめんなさいね、お邪魔してしまつて」

タクヤ 「あ、いえ・・・えっと、なんで?え、何か・・・？」

アズサ 「なんでも・・・」

アズサは去る。タクヤはその方を見つめている。

タクヤ (気まぜくになりながら) 「・・・やっぱりアレだね、あの子は不幸せな子だよ。戦

争に巻き込まれてさ、美しいのに目尻がピクリとも動かない・・・」

サツキ 「・・・ねえ、私はどうすればいいの？」

タクヤ 「・・・え」

サツキ 「・・・こんな時に、妊娠したなんて、どうすればいいのよ」

問

タクヤ (立って部屋の隅からガラス製の灰皿をテーブルに持ってくる)

サツキ 「・・・あなたの子供なのよ」

タクヤ (ポケットから袋を出し、中からタバコの葉とペーパーを出す) 「ああ・・・」

サツキ 「ここ禁煙でしょう？」

タクヤ 「禁煙のところに灰皿はないでしょ・・・(笑)」

サツキ 「カレンさん嫌がるわ」

タクヤ 「・・・だから壁を立てたのかもしれないな・・・シヨウゴは吸うから・・・へへ(笑)」

サツキ 「真面目に話してるのよ私」

タクヤ (手巻きタバコを巻きながら) 「ユズキはどうだったっけ？」

サツキ 「知らないわ・ねえ・」

タクヤ 「俺だって、不真面目なわけじゃないよ」

問

サツキ 「あなたは私のこと好きじゃないんでしょう？分かってる、私もだわ」

タクヤ 「・・・知ってるよ」

サツキ 「・・・でもこの子は？って言われると即答できない自分があるの。それはわかるでしょう？」

タクヤ 「ああ・・・」

サツキ 「・・・私あの日の夜、3ヶ月と10日前。あなたが愛してると言ってたから、一瞬その気になっちゃったのよ。変だったのね、ほんと・・・」

タクヤ 「・・・え、言った？俺そんなこと」

サツキ 「言ったわ」

タクヤ 「は(笑)・・・そうか、言ったのか俺・・・」

サツキ 「混ざってたのよ。人間の本質だっけと教えられてきた愛情と、あなたの汚い性欲が同じだと思った。私初めてだったから。そのくらい美しいものと勘違いしたの」

タクヤ 「アレ、火が・・・」(灰皿が置いてあった場所へ探しにいくがない)

問

サツキ 「・・・でもその汚い欲望から、この子ができたのは事実よ」

タクヤ 「・・・」(その辺を探している)

サツキ 「この子は私たちの未来なの」

タクヤ 「・・・未来？」

サツキ 「ええ・・・この国に未来がないなら、産まない方がいいと思うわ。でも・・・ねえ、この国はどうなるの？」

タクヤ 「そんなの・・・あなたの方がよく知ってるでしょうに」

サツキ 「何も知らないわよ・・・わかったのは、欲望が未来を作るってことだけ。ね、そうでしょう？」

タクヤ 「・・・何それ・・・(笑)」(笑えていない)

サツキ 「・・・私、なにも知らないのよ・・・」

沈黙。タクヤはイチゴをサツキに渡そうとするが、サツキは無視。
シヨウゴが上手側のドアから入ってくる。

シヨウゴ 「!?!?…こんばんは…」

タクヤ 「お、おう」

シヨウゴ (サツキに会釈をする)

サツキ 「…」

シヨウゴ 「すみません、お邪魔します…」

タクヤ 「おお…お邪魔しますって、まあ…(苦笑)」(なんとなく視線を外す)

間 (短め)

タクヤ 「…カレンは今いないけど…」

シヨウゴ 「ああ、ええ…さつき廊下を小走りしてるのが遠目に見えたんで…」

タクヤ (釈然としないが) 「あっそう…ん?」

シヨウゴ 「アレ、それ灰皿…?」

タクヤ 「あ、うん」

シヨウゴ 「こっちの部屋にありましたか?」

タクヤ 「うん、そこに」

シヨウゴ 「探してたんですよ。ああそうか、こっちに…(笑)」

タクヤ 「火、持ってる?」

シヨウゴ 「ええ」(ポケットからマッチの箱を出して渡す)

タクヤ 「おう」

シヨウゴ 「それ(灰皿)無くしてから吸わなくなったのに、癖でずっと入れてるんです」

タクヤ (火をつけながら) 「吸う?」

シヨウゴ 「あ、じゃあ遠慮なく」(巻き始める)

サツキはタクヤが吸い始めたのを嫌な顔して、次のタクヤの「灰皿」あたりで出ていく。

タクヤ 「…新しいの買わないのか?」

シヨウゴ 「え?」

タクヤ 「灰皿…あ…」(自分のタバコを消す)

シヨウゴ 「今は街も荒れてますから。新品なんて求めたら、なんて言われるかわかったもんじゃないかもしれません」

タクヤ (心ここに在らずで) 「確かにな・・・(独り言で) 未来な・・・」

シヨウゴ 「ん？」

間(短め)

タクヤ (気まずさを抑えながら) 「いや・・・昨日は悪かったな」

シヨウゴ 「あ、いえ・・・」

タクヤ 「アレはパフォーマンスだよ。いや、もちろんお前もわかってたと思うけど、完

全に演技(笑)」(笑えていない)

シヨウゴ 「・・・」(マッチの火をつけようとすることがつかない)

タクヤ 「や、まあ、わかると思うけどな・・・イチゴいる？」(差し出す)

シヨウゴ 「え・・・(顔をあげイチゴを初めて見るような目で見て)・・・いえ、いりません」

タクヤ 「あっそう・・・」

シヨウゴはすでに3本ほどマッチを試してみるが、一本もつかない。

シヨウゴ 「・・・アレ、これ湿気ってる・・・」

タクヤ 「貸してみ？(タクヤも一本やってみるがつかない) あれ・・・」

シヨウゴ 「全部ダメみたいですね」

タクヤ 「そうみたいだな」(もう一本やるがつかない)

シヨウゴ 「もういいです。さっきのが最後の火がだったんです」

タクヤ 「これ吸う？」

シヨウゴ 「大丈夫です(笑)」

間

タクヤ (気まずくて) 「・・・ユズキ、戻ってこねえな」

シヨウゴ 「今何を？」

タクヤ 「コーヒーをね、ちょっと」

シヨウゴ 「夜にですか？」

タクヤ 「うん」

シヨウゴ 「私、ダメなんです。コーヒー飲むとずっとここ(胸)が燃えてるみたいで」

タクヤ 「ああ」

シヨウゴ 「・・・それだけでなくも夜は眠れないですから・・・」(壁の方を見る)

間(短め)

タクヤ 「・・・それはアレか?壁のせい?」

シヨウゴ 「・・・」

タクヤ (話を逸らして)「・・・ここは誰もいない島なんだよ・・・」

シヨウゴ 「・・・え?」

タクヤ (立って、部屋の中を円を描くように歩く)「・・・俺はさっきの火が最後のだとも知らずに、タバコとかいうしょーもないものに使っちゃった。昼間の海は綺麗だからな。砂浜にこーやって寝っ転がって(実際にやる)、キラキラしてる海に向かって煙を吐いてたんだ・・・だけど夜が来る。夕日が沈んであたりが闇にゆっくり沈んでくんだ。熊のうめき声とかも聞こえてくるんだぜ。でもピストルはない。火をつけようとして何回やってもマッチは湿気っちゃってる・・・でも生きてかなきゃねえ・・・どうする、お前は?」

シヨウゴ (急に自分が巻き込まれ)「・・・俺いるんですか?」

タクヤ 「当たり前だろ。俺と二人で生きるんだ」

シヨウゴ 「はあ・・・」

タクヤ 「・・・とりあえず砂浜に寝っ転がるよね」

シヨウゴ 「・・・」

タクヤ 「とりあえずはね・・・」

シヨウゴ 「・・・はあ」(渋々床に寝っ転がる)

タクヤ 「・・・なあ、星が綺麗だな・・・」

間

タクヤ 「お前星座とか詳しい?」

シヨウゴ 「・・・私は、間違った愛に取り憑かれていたのです・・・」

タクヤ 「は・・・?」

シヨウゴ 「この壁ができて私は、自暴自棄になりました。愛が欲しくてたまらなくなるんです・・・あなたにایتつが取られていく中で、どうせならあいつも殺して自分も死んでしまおうかとも考えました」

タクヤ 「・・・何言ってるんだよ急に・・・」

シヨウゴ (突然声を荒げて)「でもそうじゃないですか!突然壁が立ったんですよ、あなたのために!あなたのために壁が立ったんだ!」

タクヤ 「立って）「・・・イチゴ、食べる？」

シヨウゴ 「徐々に宗教的に）「でもそんなものは、滅亡していくこの国では無意味だったのです。過去の私が間違っていました・・・私は自分から苦しみの中に生きていたのです」

タクヤ 「意外と詩人だな・・・へへ」(笑えておらず、イチゴを食べる)

シヨウゴ (宗教的に)「・・・でも私は今、本当の愛を知っています。現実の欲望よりも大切な永遠に残り続ける愛を知ったのです・・・だからあいつはあなたに引き渡そうと思います・・・」

タクヤ (なんて言えばいいかわからず取りあえず)「・・・おう・・・」

シヨウゴ 「私はもういいのです・・・それだけタクヤ様に言いたいと思っていて・・・」

タクヤ 「・・・」

シヨウゴ (上を見上げ少し大袈裟に)「・・・ああ星が綺麗ですね(笑)」

タクヤ 「もういいよ・・・(笑)」(笑えておらず、代わりにイチゴを食べる)

下手側の扉からアズサが入ってくる。

アズサ 「あ、シヨウゴさん、やっぱりこの部屋にいたの・・・」

シヨウゴ 「ああはい、姫様。先ほど」

アズサ 「そう、お部屋にいないから心配したわ。どうして？」

シヨウゴ 「いえ、少しタクヤ様にお話をしていました・・・」

アズサ 「星のお話？」(部屋に入る)

シヨウゴ 「え、いや・・・」(タクヤと顔を見合わせる)

アズサ 「星が綺麗って」

シヨウゴ 「あ、なんでもないんです(笑)」

アズサ 「そう・・・」(シヨウゴの顔を撫でる)

ユズキがコーヒーカップを二つ持って上手側のドアから入ってくる。

ユズキ (アズサとシヨウゴを認めて)「あ、アズサ様？」

アズサ (小さく会釈)

ユズキ 「ごめんなさい遅くなって。こっちがクリーム入り。(テーブルの上に置く)サ

ツキ様は？」

タクヤ 「ああ、さつきね・・・」

ユズキ (冗談のように) 「代わりにパパになってる・・・(笑)」

シヨウゴ (隣室に去ろうとしていたが、振り返る) 「・・・」(何も言わず、ユズキを見る)

短めの沈黙。謎の空白に、タクヤはシヨウゴとユズキを交互に見る。

ユズキ (タクヤに) 「あのね、一度淹れたのにこぼして全部やり直しになったんです」

タクヤ 「ああ、それは・・・(苦笑)」

ユズキ 「じゃあこれはアズサ様に。飲みますか？」

アズサ 「・・・ええ、いただくわ」

ユズキ 「はい」(もう一つのカップも置く)

アズサ 「これは？」(イチゴを指す)

タクヤ 「あ、私がもらってきたんです。どうぞ。今日採れたものみたいですから、新鮮ですよ」

アズサ 「ああ・・・(自分の手を見て)手を洗わなきゃ・・・」

タクヤ 「そうか。ユズキ、タオル」

ユズキ 「あ、ええ」(出て行こうとする)

アズサ 「ううんいいわ・・・ユズキさんが食べさせてくれるなら・・・」

ユズキ 「え？」

シヨウゴ 「あ、じゃあ私が・・・」(イチゴを取ろうとする)

アズサ (その手を掴み) 「ううん、私はユズキさんに食べさせて欲しいの・・・」

ユズキ (一瞬嫌な顔をするが) 「はあ・・・」

ユズキはイチゴを一つ取りアズサの前へ。アズサはゆっくりとユズキに近づき、ユズキの顔を凝視する。男たちはそれを不思議そうに見る。アズサはユズキの持つイチゴをゆっくりと取り上げ、ユズキの出した腕を優しくゆっくりと舐める。

ユズキ 「キャッ!？」(驚いて手を引く)

タクヤ (同時に小さく) 「ちよっと」

ユズキはアズサを驚いて見るが、彼女は全く表情を動かさない。

アズサ 「・・・そしたらお返ししてあげなきゃね・・・」(イチゴを一つ取り差し出す)

ユズキ 「・・・は」

アズサ 「ほら、食べて・・・」

ユズキはビクビクしながら、しかし何かの引力のようにアズサの持つイチゴに近づく。

ユズキが近づくと、アズサはそのままユズキの頭に優しく手を回し軽くキスをする。

沈黙・・・アズサは近くにいたタクヤにイチゴを渡す。タクヤは意味がわからずイチゴとアズサを繰り返し見て、何故かイチゴを一口で食べる

シヨウゴ 「・・・あの姫様・・・えっと、その・・・」

アズサ 「ちよっとした悪ふざけよ。悪い？」

シヨウゴ 「あ、いえ・・・」

アズサ (タクヤに)「・・・甘い？このイチゴ」

タクヤ 「え、あ、はい。まあ、ええ・・・」

アズサ 「そう・・・」

ユズキは次第に呼吸が荒くなる。そして、床にへたり込む。

タクヤ 「ユズちゃん・・・？」(近寄る)

ユズキ 「ううん、大丈夫です・・・」(下を向いたりアズサの方を向いたりしながらベツ

ドの方へ向かい、座る。まだ呼吸が少し荒く、頭を抱えている)

間

アズサ (タクヤに)「・・・タクヤさん、北の国はいつ攻撃を開始するのかしら？」

タクヤ (ユズキのことを気にしながら)「は、北の国ですか？・・・あの、えっと、まだ定かではないのですが、しかし、もうここ数日なのではないでしょうか」

アズサ 「そうなのね」

タクヤ (ユズキに)「どうかしたの？」

ユズキ 「ううん、少しだけ頭痛がしたただけだから」

タクヤ 「横になるか。(アズサに) よろしいですか？」

アズサ 「ええ」

ユズキ 「・・・大丈夫よ。でも少し座ってたい・・・」

タクヤ (アズサに視線を向ける)

アズサ 「それはもちろんどうぞ」

タクヤ 「あ、これ飲み物・・・」(自分のコーヒーを指す)

ユズキ 「・・・あの、私クリームは苦手なんです」

タクヤ 「ああ・・・(とても小さな声で)・・・じゃあイチゴ・・・」

アズサ 「(ああ・・・の後に)「じゃあこれだわ」(差し出す)

ユズキ 「あ、いや・・・」

アズサ 「いいのよ、気にしないで飲んで」

ユズキ 「受け取らない」「・・・」

アズサ 「遠慮しなくていいのよ」

ユズキ (アズサからコーヒーを受け取り少し飲む)

間

アズサ 「・・・ふふ」(小さな笑みを浮かべる)

間

シヨウゴ (妙にびくつく)「は・・・」

タクヤ (シヨウゴをチラチラ見て)「・・・え、あのアズサ様今・・・」

アズサ 「何？」

タクヤ 「・・・い、いえ、その、少し表情が緩んだように見えましたので・・・」

アズサ 「ええ。(シヨウゴに)シヨウゴさん、とても素敵な娘さんじゃない。とても可

愛らしい・・・」

シヨウゴ (ビクつきながら)「あ、あの姫様そろそろ・・・」

アズサ (遮って)「あなたが、いつも言ってるから。娘を作ったことは、欲望に走った

過去の間違いだって・・・」

ユズキ 「・・・は？どうゆう・・・」

シヨウゴ (同時に)「あ・・・」

アズサ 「ねえ、言ったの？「あなたは私の失敗です」って・・・後悔しているんでしょ

う？あの子なんていらなくて、苦しみの根源だったって、私に熱く語ってく

れたじゃない・・・」

ユズキ 「は・・・」

シヨウゴ (同時に)「いや、あの姫様・・・!」

アズサ 「なんで?どうして言わないの?」

シヨウゴ (同時に)(急に膝を地面につけ、宗教者のように)「申し訳ありません!わかっています!反省はしていますのでこれ以上言わないでください!嫌わないでください・・・!」

アズサ (ユズキに近づき)「・・・でも、とても素敵だわ・・・」(ユズキの頬を撫でる)

ユズキ (かろうじて手を払う)

カレンが上手側のドアから入ってくる。少し焦っている様子。

カレン 「あ、タクヤさん!?やっぱり来ていたのね!」

タクヤ (異様な空間に呑まれていたので驚き)「え・・・おお・・・」

カレン 「ねえ大変よ。来てちょうだい!」

タクヤ 「え、どうかした・・・?」(あまり目を合わせない)

カレン 「呼んでいらっしやるの!また大勢自殺したって。また笑っている死体よ・・・」

タクヤ 「は、また・・・」

カレン 「ええ。今日のは東の方だって・・・ええ、だから急いで向かってちょうだい・・・」

タクヤ (場の空気を気にしつつも)「・・・うん、わかった・・・」

タクヤは色々気にしながら出ていく。

カレン (アズサに)「アズサ様、どうしてこちらに・・・?」

アズサ 「皆さんとお話ししていたのよ」

カレン 「はあ・・・」

アズサ 「星の話をしていたのよ。ねえ?シヨウゴさん」

シヨウゴ (膝をついたまま)「あ、ええ、はい・・・」

カレン 「あなたは どうして・・・(少し嫌味で)あなたのいそうなところは探したのに、ここに居るのは盲点だった」

シヨウゴ 「ああ・・・」

タクヤ (戻ってきてドア口から)「おい、シヨウゴ!」

シヨウゴ 「あ、はい。ただいま」(出て行こうとする)

ユズキ 「ねえ、パパ・・・」

カレン (被って)「ねえ、タクヤさんと何を話していたの？」

シヨウゴ 「・・・」(アズサを見る)

カレン (アズサを見るが、聞きたい思いが勝り)「・・・ここで何か話したの？」

シヨウゴ (アズサを見るが、決心して)「・・・お前を引き渡すって言ったんだよ・・・」

カレン 「・・・そう・・・」

ユズキ (同時に)「・・・は・・・」

シヨウゴ 「・・・じゃあ・・・」(出ていく)

ユズキ (小さく)「ちよっとねえ・・・」

シヨウゴはユズキを無視して出ていく。カレン、ふと鼻を鳴らし、灰皿を発見し、その匂いの元がタバコだと察する。

カレン (早く立ち去りたくて)「・・・私、戻るわね」

ユズキ (心ここに在らずで)「・・・」

カレン 「・・・でもすぐ帰ってくるわ」

カレンも出ていく。取り残された2人。沈黙。

ユズキはカレンが出ていった方向を虚に眺めたり、かと思えば壁を眺めたりする。

アズサ 「・・・また大勢人が死んだのね・・・」

ユズキ 「・・・」

アズサ 「でも戦争だもの。これからもたくさん死ぬのね・・・」(彼女は微笑を漏らす)

ユズキ 「・・・やめて。笑わないで」

アズサ 「あら、どうして？」

ユズキ 「・・・あなたが笑うと不快な気持ちになる・・・」

アズサ 「ふふ・・・」(小さく笑う)

ユズキ 「・・・随分悲しそうに笑うから・・・」

間

アズサ 「・・・イチゴ、一つ食べる・・・？」(イチゴを手取る)

ユズキ 「・・・」

アズサ (イチゴをぶら下げるように持ち、少し離れたユズキに差し出す)
ユズキ (それをじっと見て動かない)

間

アズサ 「あなたは不幸せなのよ・・・」
ユズキ 「・・・そんなこと言わないで・・・」
アズサ 「そんな睨まないですよ・・・私もあっちじゃただの女だったのよ。欲望の目で見られるただの女・・・」

ユズキ 「え・・・」
アズサ 「でも今は違う、王妃だもの。欲望なんて苦しみを生み出すだけよ・・・私はあなたを愛してるわ。だからただ私を愛して、身を委ねてくれればいいのよ・・・」

ユズキはゆっくり立って、アズサに近づいく。そして、イチゴを手で奪うように取り床に捨て、アズサに、深いキスをする。

アズサ 「・・・それでいいの・・・」(微笑を浮かべる)
ユズキ 「・・・アズサ様・・・お背中 of 刺青、私にも見せてくださいますか？」

ユズキはアズサにもう一度深くキスし、アズサのドレスを脱がせていく。

音楽がなくなって、暗転。

〈3場〉翌日。夜。

上手側のベッドにサツキが座っている。その横に、カレンが緊張した様子で立っている。テーブルの上のイチゴが山盛りに戻っている。灰皿もテーブルの上に置いてある。ハルトは、立って壁の方を見ている(恐らく何か音が気になるのだろう)

ハルト 「・・・なんの音だ・・・」
サツキ 「・・・雨漏りよ・・・」

間

カレン (恐る恐る)「・・・あのですから、サツキ様が今おっしゃったのはですね・・・」
ハルト (強く)「あ？」

カレン (引いて)「あ、いえ……ですがお言葉ですが……」

ハルト (遮って)「黙れ、しつこいぞ」

カレン 「……」

ハルト (壁の方を見ている)

間

サツキ (カレンに)「……少し寒いわね……」

カレン 「え、そうでしょうか……?」

サツキ 「ええ……」

ハルト (振り返りイチゴを一つ摘んで)「……これは?」

カレン 「え、あ、タクヤ様が、北の街の方の畑からもらってきたものごさいます」

ハルト 「そうか……ん?どうしてタクヤがそんな方へいくんだ?」

カレン 「よくわかりませんが、しかし見回りではないでしょうか。北方は今特に、不安定……つまり、だから危険ですので、何かがあった際にすぐ見つけ出せるように。だからタクヤ様はこの国のことを第一に考え、見回りをし、その際にこのようなイチゴを見つけてきたのです」(何故か少し誇らしげ)

ハルト 「そんなことしてるのか?」

カレン 「ええ。あの方は率先してこの国の幸せと平和を祈っていらっしやって……」

ハルト (遮るように)(特にカレンに向けず)「勝手なことしやがる……あいつはどこだ今……?」

サツキ 「……昨日の集団自殺の処理でしょう?」

ハルト 「ああ……」(舌打ちをして、イチゴを灰皿の上に握り潰す。果汁が滴る)

カレン (異様な光景に驚き)「……は、ハルト様?」

間

サツキ (カレンに)「ごめんなさい。また後日にしましょう」

カレン 「え?」

サツキ 「こんなじゃ全然ダメ。話にならないもの。折角こうやって向かい合うことができても」

カレン 「いえでも……」

ハルト (イチゴの汁がついた手を異常に恐れ)(カレンに)「おい、タオル」

カレン (意味がわからず)「へ……?」

ハルト (舌打ち)

カレン (理解し)「あ、ええ(部屋を見回してタクヤが1場で持ってきたタオルを発見し取りに行くが、ハルトに渡して良いか躊躇してモジモジする)

間

サツキ (深呼吸をして)「・・・話をしてもいい?」

ハルト 「・・・」

サツキ 「大事な話だから兄様、もう一回ちゃんと聞いてちょうだい・・・」

ハルト (舌打ちをして、顔を背ける)

カレン (恐る恐る)「・・・ハルト様・・・」

ハルト (振り返って、カレンの持つタオルを引ったくる)

カレン (ひったくられた時、「ヒッ」というような小さな声をあげ、少しよろける)

サツキ 「ねえ・・・」

ハルト (少し攻撃的に)「なんだよ・・・」

間

サツキ 「・・・だから、この子を兄様の子にして欲しいの・・・」

ハルト 「・・・あ?」

サツキ 「この赤ちゃんをあなたの子供にして欲しいって言ってるのよ・・・」

ハルト (サツキに向き直って)「・・・その父親のわからない子供をか?」

サツキ 「・・・そう・・・お願いよ・・・」

ハルト (恐らくその前にも聞いたが)「・・・誰の子だ?」

サツキ 「だから、誰のでもないって言ってるわ・・・強いていうなら・・・神の子よ」

ハルト 「神?」

サツキ 「そうよ・・・神様・・・」

隣室からシヨウゴが出てくる。他の人がそっちを見る。

カレン 「!?!」

シヨウゴ (ハルトに気づき)「あ、いやなんか、あの、すみません・・・(カレンに)俺の

部屋のピストルがなくて・・・」

カレン 「え?」

シヨウゴ 「灰皿みたくこっち来ちゃってるかもって・・・(ハルトの方を見て)あの、すみません・・・」

カレン (若干イライラして) 「知らないわよ。私見たことないもの……」

ハルト 「……いつそのこと殺してしまおう……」

サツキ 「は……?」

シヨウゴ (同時に) 「え?」

ハルト (タオルをサツキに投げつけ) 「殺してしまえ、そんなガキ! (カレンに) おい!

俺の部屋のピストルを持ってこい!」

シヨウゴ 「ガキ……?」

カレン (同時に) 「どうゆうことですか!??」

サツキ (お腹に手を当てて) 「そんなことやめて!」

ハルト 「こいつのガキを殺すんだ!」 (サツキがいるベッドの方へ)

カレン 「何を言ってるんですか!??」

サツキ 「やめて!」 (ベッドの端へ逃げ、お腹を守るように)

ハルト (シヨウゴに) 「おい、こいつ押さえつけろ!」

シヨウゴ 「はい?」

ハルト (シヨウゴの胸ぐらを掴んで) 「こいつはガキを、欲望の塊をこの国に産み落とそうとしてるんだ!それだけじゃなく、王である俺の子供にしろなんて言い出したんだ!」

シヨウゴ 「ええ……」

ハルト 「だから殺すぞ!押さえつけろ!早く!」 (シヨウゴをサツキの方へ押し飛ばす)

シヨウゴ 「は……(よろけて体勢を保とうとして結果的に押さえつけるような形に) あ、すみません、サツキ様!」

サツキ (抵抗して) 「やめてよ!」 (シヨウゴから逃げようとする)

ハルト (モジモジしているカレンに) 「おい、お前はピストルだ!早く!」

カレン 「何を言ってるんですか!??」

ハルト (カレンからタオルを奪い) 「ガキを殺す!早く持ってこい!ピストル!」

カレン (サツキを見て) 「え、何をやる気ですか!??」

ハルト 「ほら行け!」 (カレンをドアの方へ押しつける)

ハルトに突き飛ばされるようにカレンが上手側のドアの方に向くと、ドアが少し開いていることに気づき、思い出す。

カレン (勢いで興奮して) 「ユズキ!?そこにいるんでしょ!」

シヨウゴがサツキを抑える力が弱まり、ハルトもそっちの方を向く。

カレン 「知ってるのよ!入ってきなさい!」

ユズキ (飄々と入ってくる)

カレン (ハルトに) 「申し訳ございません」

間

カレン 「・・・全部聞いてたんでしよう!?すぐ止めなさいよ、こんなこと!」

ユズキ 「・・・」

間

カレン 「ユズキ!」

ユズキ 「うるさいわ、お母さん」

ハルト (合点がいき) 「・・・お前か?」

ユズキ 「はい?」

ハルト 「お前が唆したんだろう。こいつ(サツキ)にキチガイじみた事を言わせただな・・・そうに決まってる」

ユズキ (飄々と) 「・・・違うわよ」

サツキ 「は・・・?」

少しの沈黙。シヨウゴはユズキを見て、気まずそうに顔を背ける、

ユズキ (イチゴを一つ食べる)(カレンに) 「・・・なんか昨日の方が美味しかった気がする。

気のせい?」

カレン 「・・・は、ユズキ、あなたが昨日だって・・・」

ユズキ (遮って) 「私は関係ないわよ。(ハルトに) 関係ないの。サツキ様が勝手に気が狂ったんじゃない?」

サツキ 「何を言ってるのよ・・・」

ユズキ (ハルトに) 「きつとそうなのよ。それより、ねえハルト様、これ美味くないと思いませんか?」

ハルト (曖昧に) 「ああ・・・」

ユズキ 「もっと美味しいお菓子持って差し上げたいけど、でもないのよ。キッチンの戸棚のどこにも。この宮殿にないってことは、国のどこにもないってことになるわ・・・」

間

カレン (ふとイチゴを一つ食べて) 「・・・あら、美味しいじゃない・・・」

ユズキ 「お母さんがそう思うならそうなのかもね。それ昨日のでしょう?」

カレン 「違うわよ。今日の朝また持ってきたの」

ユズキ 「そう。てっきり古いのかと思った。もしかしたらイチゴを食べること自体が古いのかもしれないわ。でも新しいお菓子はここにはないの」

カレン 「いないわ」

ユズキ (サツキに) 「あなたも?」

サツキ 「・・・」(怒りなのかなんなのか顔を歪めて、お腹を触る)

ユズキ (小さく笑って) 「へへ・・・」

間 (短め)

ハルト (突然立って出て行くこうとする)

カレン 「どこへ?」

ハルト 「ピストルを取りに行く」

カレン 「それでどうするのですか!?!そのお子様はまだ生まれませんよ!」

ハルト (サツキに視線を向ける)

ユズキ (それを見て小さく笑う)

ハルト (ユズキに) 「何がおかしい」

ユズキ 「いや・・・(笑) どうするつもりだったのかなって (笑)」

ハルト 「・・・」

ユズキ (別に誰にいうわけでもなく) 「こーやって?こーやって・・・へへ、ハハ
ハ(笑)」(右手をピストルの形にし、自分の股の間に持って行き、大声で笑う)

3人は白けた沈黙。ユズキは笑いすぎてむせかえる。

ハルト 「・・・殺すぞ、お前」

ユズキ 「どうぞご自由に。好きに殺してせばいいわ、私は怖くないもの」

カレン 「お願いだからやめてちょうだい!挑発するようなこと言わないで!」

ユズキ 「でも本当よ。本当に怖くないの・・・こんなグロテスクな現実とサヨナラできると思ったら」

カレン 「ねえ、ユズキ・・・！」

ユズキ 「お母さんには絶対にわからないことだわ。こんな国でつまらない恋に取り憑かれていた女にはわからないの！」

カレン 「・・・ああ・・・！」（気が動転して、部屋をフラフラと歩き回る）

間

サツキ （ユズキの豹変した態度に恐れながら）「・・・あなた、どうしてしまったの？」

ユズキ 「・・・どうもしてないわよ」

サツキ 「どうかしてる」

ユズキ 「どうもしてないわ・・・でも強いていうなら新しい人間になったのね、私は」

シヨウゴはユズキと目があって、隣室に去ろうとする。

ユズキ 「待ってパパ！」

シヨウゴ 「・・・ん？」

ユズキ （シヨウゴの方まで駆けていき、抱きつく）

シヨウゴ 「!？」

ユズキ 「ねえ私まだ言われてないわ。「あなたは私の失敗です」って・・・言うんじゃないかったの？」

シヨウゴ 「え・・・ああ・・・」

カレン （同時）（小さく）「失敗・・・？」

ユズキ 「ほら言ってる・・・こんな国よ。そのくらい簡単でしょ？あの人の言うことを聞くのよ・・・」

シヨウゴ （顔を背け）「・・・ユズキ」

ユズキ 「ほら、あの人の言う通りに、ね？・・・あなたは・・・」

シヨウゴ 「・・・」

ユズキ 「繰り返し、あなたは・・・」

シヨウゴ 「・・・あなたは」

ユズキ 「私の・・・」

シヨウゴ 「・・・私の」

ユズキ 「失敗です・・・」

シヨウゴ 「・・・失敗です」

ユズキ 「あなたは私の失敗です」

シヨウゴ 「・・・あなたは私の失敗です」(少し楽になる)

ユズキ 「もう一回」

シヨウゴ 「あなたは私の失敗です」

ユズキ 「もう一回」

シヨウゴ 「あなたは私の失敗です」

カレン (怖くなって)「・・・ねえ、あなた・・・？」

ユズキ (シヨウゴの頬にキス)「・・・ありがとパパ、愛してるわ」(隣室へ去ろうとする)

間 (短め)

カレン (受け入れられてないが)「・・・どこ行くの!？」

ユズキ 「どこでもいいでしょ？」

カレン 「ねえ!」

ユズキ 「夜の散歩よ!」(出ていく)

※ココまでのユズキとシヨウゴの会話の最中に、一度ハルトは外へ行こうとするが、カレンが顔はユズキの方を見ながら、やんわり止める。

沈黙。先程の意味不明な宗教的な行為を受け、サツキとカレンの目線がシヨウゴに注がれる。

シヨウゴ (気まずくて)「・・・ちょっとトイレ・・・」(足早に出ていく)

カレン 「あ、ちょっと・・・」

シヨウゴ (無視して出ていく)

間

サツキ (カレンに)「・・・あの子のこと見てきた方がいいわ」

カレン 「え、いやでも・・・」

サツキ 「いいから、行った方がいい」

カレン 「あ、はい・・・では・・・」(ハルトにも軽く礼をして隣室の方へ出ていく)

沈黙。ハルトは再び壁の方へ行き触る。

サツキ 「・・・雨、ずっとやまないのよ」

ハルト 「・・・あ？」

サツキ (少しビクツとするが) 「・・・今日のお昼頃、人が話してるのが聞こえたの。北の国境はもう明日のうちには落とされるって・・・」

ハルト 「・・・」

サツキ 「3日も経たないうちに、ここに到達してしまうって話してたわ」

ハルト 「・・・そうみたいだな・・・」(サツキには目を向けない)

サツキ 「みたいて・・・」

間 (短め)

ハルト (立つ)

サツキ 「・・・ねえ待って・・・その時、アズサ様はどうするの？」

ハルト 「・・・は？」

サツキ 「本当に北の国がここまで到達してしまったら」

ハルト (流す様子) 「ああ・・・」

サツキ 「・・・この子が生まれるまでには恐らくこの国はもう想像のつかないことになっているでしょう？その時・・・あなたがこの国も、それにあの人の命を握っているのよ」

ハルト 「・・・そんなの、俺が決めることじゃない」

サツキ 「・・・じゃあ誰よ」

ハルト 「アズサだ・・・あいつを愛しているからな。国も俺たちも全てをあいつが決めるんだ」

サツキ 「・・・あの人のせいで兄様はおかしくなってしまったのね」

ハルト 「やっぱりお前はアズサの美しさを妬んでるんだな・・・それであいつを殺そうと思ってる。そうだろう？」

サツキ 「・・・」

間

サツキ (イチゴを手に取り) 「・・・空に赤い三日月が浮かんでるの。私嘘だと思って外に出たら本当にあるのね。お母様が死んだ時に出てた月よ」

ハルト (灰皿を手に取り) 「赤い月？」

サツキ 「見ていないの？・・・(ハルトが回している灰皿を見て) 兄様はタバコを吸わ

なくなつたわね。いいことよ。タバコっていうのは人をつまらなくするの。お酒と同じ。宮廷の人はみんな吸うのよ。戦争のせいで特に」

ハルト 「俺にはそんなものいらなからだ」

サツキ 「禁欲的だものね。そんな兄様は好きなのよ私。(お腹に触り)でもこの子だけは譲れないの、わかつて」(ハルトの彼の手を掴み、ぎこちなくキスをする)

ハルト 「やめろ・・・」(手を引っ込める)

間

サツキ 「・・・私、あの月はお母様のことだって思うわ」

ハルト 「・・・は？」(灰皿を見ている)

サツキ 「お母様は私たちのことなんて見てくれなかった。お父様のことばかり見ていたもの。でもお父様はそうじゃなかった。国の全てに深い愛を注ぐのに夢中になつて、明君だって今でも言われているもの」

ハルト 「俺を咎めているのか？父と比べて・・・」

サツキ 「違う・・・お母様の話よ。そんなお父様に愛して欲しいって死ぬ間際まで言っていたわ。私たちを愛してくれないのに、バカみたいにずっと・・・そのせいよね、兄様は愛が何かわからないのよ」

ハルト 「(灰皿を触っている)「・・・」

サツキ 「・・・それなのにアズサ様のことを愛してると言うわ。どうして？どうして愛してるなんて言うの？・・・(ハルトの腕を掴んで)・・・私は隠さず言うわ。あなたのことが好きなの。好きよ、あなたを私のものにしてしまいたいよ・・・私だって愛はわからないわ。でもこれは本当よ・・・」

ハルト (大きく目を見開き、サツキに目を向ける)

間 (少し)

ハルト 「・・・汚いな・・・」

サツキ 「え・・・」

ハルト 「なんでそんな穢らわしい目で俺を見る・・・あの女と同じじゃねえか」

サツキ 「・・・お母様と？」

ハルト 「あの女と同じでお前は欲望に取り憑かれているんだ」(イチゴを一つ潰す)

サツキ 「もう潰さないで！」

ハルト 「・・・あの女は俺とお前、2人も生んだんだ。無責任にこんな地獄みたいな国に生みやがった」

サツキ 「地獄って・・・」

ハルト 「それで今度はお前が俺にそのような目を向ける・・・言っとくけどな、俺は愛を知っているぞ。アズサが教えてくれたんだ。俺はあいつが半裸で部屋を覗いてきても、決して求めたりしない。ただあいつを愛して祈るだけだ・・・あいつは俺を無条件に愛してくれる・・・この世界の苦しみが無い、愛の世界に俺を連れていくんだ・・・」

サツキ (少し気圧されて) 「・・・何を言ってるの・・・」

ハルト 「それが新しい愛なんだ・・・お前は欲望のままに地獄を繰り返そうとしてる。ああ！やっぱりピストルを・・・」(立つ)

サツキ (強く) 「兄様！・・・何度も言うわ、この子は神様の子よ」

ハルト (舌打ち) 「・・・」

サツキ (腕を掴んで) 「・・・でもそうよ。何も無い宇宙に人類が生まれたのは神様が必要だと思ったからだわ・・・この子も同じよ。私たちの希望のために、神様が必要だと判断したの」

ハルト 「しつこい！」

サツキ 「これだけは本当よ、この子が私たちの未来なのよ・・・」

カレンが戻ってくる。それを見てハルトはサツキを突き飛ばす。

サツキは地面にお腹を押しえて倒れ込む。

カレン (倒れたサツキに駆け寄って) 「サツキ様！」

サツキ 「・・・」

カレン 「大丈夫ですか!？」

ハルト (カレンに) 「今何時だ？」

カレン (つい大きな声で) 「ええ!??・・・あ、えっと何時でしょう?夕日はもうとつくに・・・」

ハルト (舌打ちをして出て行こうとする)

カレン 「あ、ハルト様、先ほどは娘が(申し訳ありませんでした)」

ハルト (カレンが言い切る前に出ていく)

間 (短め)

カレン (サツキに) 「・・・あの、先ほどは、あの娘がすみません・・・」

サツキ (かろうじて) 「・・・ええ・・・」

カレン 「あの子どもにもいなくて・・・あ、どこかお怪我は・・・？」

サツキ 「・・・」(お腹を触っている)

カレン 「え、お腹・・・大丈夫ですか!？」(勢い余って強くお腹を触る)

サツキ (払って) 「やめて・・・」

カレン 「あ、や、すみません・・・あの、私すっかり動転しちゃって・・・へへ(何故か小さく笑ってしまう)・・・あ、すみません・・・」

サツキ (かろうじて立って) 「・・・ううん・・・ねえ、少し一人にしてくれない？」

カレン 「え・・・いやしかし・・・」

サツキ 「少しいいのよ・・・」

カレン 「で、ではお部屋でお休みになった方が・・・(灰皿を見て)・・・知らないうちに部屋がタバコ臭くなった。嫌なこと・・・」

サツキ 「・・・ううん、ここはイチゴがあるから」(一つ摘んで食べる)

カレン 「え？」

サツキ 「どうしてかしらね・・・私祈りたくなるわコレに」

カレン 「はあ・・・祭壇じゃありませんわ」

サツキ 「・・・え」(少し拍子抜け)

カレン 「ご先祖のお墓でも・・・」

サツキ 「もちろんわかってるわよ。同じような気がするってだけ・・・ねえ、少しでいいのよ、ダメかしら？」

カレン 「はあ・・・」

カレンは行こうか迷っている。外からタクヤが入ってくる。上着を羽織っている。

タクヤ 「・・・おう」

カレン 「あら、タクヤさん・・・」(喜びを顔に出して)

タクヤ (二人を見て、なんとなく気まずい感じ)

カレン 「やっと終わったのね。お帰りなさい・・・」

タクヤ 「うん、やっとな・・・(笑)」(イチゴを食べる)

間(短め)

タクヤ 「・・・え、アレ、2人何・・・え、なんか話してた？」

カレン 「え？特に何も。少しサツキ様のご相談にね・・・随分かかりましたのね」

タクヤ 「・・・ああ、多かったんだよ人数、50人くらい・・・(苦笑)」

カレン 「そうだったのね・・・」

タクヤ 「うん、もう何がなんだか、嫌になるほど。それがみんな笑ってるんだから・・・
ねえちよっと寒くない？」

カレン 「そう・・・ですか？」

タクヤ 「うん、若干・・・(サツキに)大丈夫？」

サツキ 「あまり良く聞いておらず」「・・・ん？」

タクヤ 「あ、いやだから気温・・・」

サツキ 「別に・・・」

タクヤ 「いやでも、一応これ・・・」(自分の羽織ってた上着を差し出す)

サツキ 「は・・・」(受け取らず、少しだけカレンを見る)

カレン 「でも確かに少しだけ寒い・・・雨のせいだわ。いつになったら止むのかしら。まだ降ってた？」

タクヤ 「うん、でもあと二、三日で止むよ・・・俺さ、雨がいつ止むかわかるの。自慢じ

やないけどその辺の動物よりも早く察知できるからね・・・へへ(笑)」

カレン 「そう(笑)」

タクヤ 「鼻が効くから・・・(小さくサツキのお腹を指して)冷えると悪いよ」

サツキ 「(渋々受け取る)」

間(短め)

タクヤ 「(紛らわしに、イチゴをひとつ食べて)「・・・美味しいなあ・・・」

カレン 「あら、タクヤさんも知っていることなのね」

タクヤ 「え・・・？」

カレン 「うん、でも本当に着た方がいいと思うわ・・・もうだってあなたの体はあなた一人のものじゃないんですから・・・(タクヤに)ねえ？」

タクヤ 「(あまり答えたくない)「・・・うん」

カレン 「そうよ、大事にしないと・・・それにねタクヤさん、サツキ様は不安なのよ。お腹のことも色々・・・だってさっきこんな果物に祈りたくなったらって急に。祭壇みたい・・・(笑)」

タクヤ 「(拍子抜け)「祭壇？」

サツキ 「(同時)「いや、それは・・・」

カレン 「ええ。面白い・面白いなんてアレですけど。でもナイーブになってるのかもしれないわ。戦争だって、昨晚の集団自殺のことだってあるし・・わかりませんからもう何も未来が。不安なのよ・・・」

間（短め）

タクヤ 「・・いやでも俺も祈りたいかもな・・」

カレン 「え？」

タクヤ （イチゴを食べて）「うんわかる気がするよ。（サツキに）ほら、赤いしね？」

サツキ 「赤い・・」

タクヤ 「赤いから・・死ぬほど見てきたドス黒い赤とは大違いだよ。死ぬほどって・・へへ（笑）・・（イチゴを一つ摘んで）赤い月にそっくりなんだよなコレ。ほらあれよ？お前が見てたらエロい気持ちになるって言ってたあの赤い月だよ。そしたら祈りたくなるのもわかるだろう？」

カレン 「そんなこと言った？私」

タクヤ 「言ったよー・・それにこれはこの無人島における唯一の希望の木だからね」

カレン 「なにそれ？」

タクヤ （円を書いて）「だからここは無人島なんだよ。広い絶望の海で孤立した無人島・・そんな中でこの木だけを頼りに、俺は生きてるんだな・・へへ（笑）」（コンポーター皿を掲げる）

カレン （サツキに）「何言ってるのかしら？」

サツキ 「イチゴは木になるもんじゃないわ」

タクヤ 「それもそうだ（笑）」（少し大きめの笑い）

間

タクヤ （恥ずかしくなってイチゴをひとつ食べ）「・・美味しいなあ・・」

サツキ 「・・ねえ、タクヤさん」

タクヤ 「ん、何？」

サツキ 「・・あの・・昨晚、あなた、笑い声を聞かなかった？」

タクヤ 「笑い声？誰の？」

サツキ 「・・アズサ様よ・・」

2人 「・・え？」

サツキ 「私聞いたのよ、昨晚あの人の大きな笑い声・・廊下を歩いてたら外から聞こえたの」

タクヤ 「あの人が大声なんて（そんな・・・）」

サツキ （遮って）「確実にあの人だった・・・それによく考えたら東の方だった気がするの・・・それで私思うのよ。自殺ってあの人のせいなんじゃないかって」

タクヤ 「・・・は？何を（言ってるの？）・・・」

サツキ 「だっておかしいもの。あの人が来てから兄様は正気じゃないこと言い出して、集団自殺なんて恐ろしいことが起こり始めたわ」

タクヤ 「違うよ。それは戦争が激しくなったから・・・」

サツキ （遮って）「違うわ絶対・・・それでね、もし本当にあの人のせいなら、あの人を殺さなくてはいけない・・・」

タクヤ 「殺す!？」

サツキ （熱を込めて）「ええそうよ。じゃないと国はもっと壊れていくわ!」

カレン 「サツキ様、いくら何でもそんなこと言うのはおやめください」

サツキ 「私は王の妹よ。国のことを思っているの!」

間（短め）

サツキ 「・・・やっぱり私の部屋にするわね」

タクヤ 「え？」

サツキ 「一人になりたいの、戻るわ」（出て行こうとする）

タクヤ 「え、いやちよっと・・・」

シヨウゴが戻ってくる。

サツキ 「あ・・・」

間（短め）

シヨウゴ 「あ、いや（長かったのは）下痢してたんですよ・・・」

他 「・・・」

サツキはシヨウゴを躲すように出て行こうとする。その手をシヨウゴは無意識にも掴む。

サツキ 「!？・・・（意外と強く握っているらしく）・・・痛いわ」

タクヤ 「おい!」

シヨウゴ 「あ、いや・・・」（自分がやったことに驚き、手を離す）

サツキは出ていく。シヨウゴは手を見つめてグーパーしてみる。

タクヤ 「何やってんだよ」

シヨウゴ (説明が付かず)「あ、いやなんか・・・」(手をグーパー)

沈黙。

カレン (サツキが出て行った方を見て)「・・・嫉妬が彼女の心を蝕んでいるのね・・・」

タクヤ 「何それ？」

カレン (シヨウゴに)「随分長かったのね」

シヨウゴ 「だから下痢なんだよ・・・」(お腹を触る)

間(短め)

タクヤ 「・・・あ、虫・・・」

カレン 「え？」

タクヤ 「なんか虫いるなここ・・・」(部屋を探す)

カレン 「蚊？」

タクヤ 「蚊じゃないよ、もうちょい大きい・・・」(シヨウゴに)「いるよな？」

シヨウゴ 「え・・・いやどうでしょう・・・？」

タクヤ 「いるよ！探せよ！」

シヨウゴ 「はあ・・・」(渋々探し出す)

タクヤ 「・・・だってここちょっと臭いもん！」

カレン 「臭い？タバコでしょ、あなたの」

タクヤ 「は？」

カレン 「タバコの臭いでしょって、あなた達が吸った。灰皿なんか出して」

タクヤ 「違うよ！・・・カビ臭いんだ」

カレン 「ええ？」

タクヤ (虫を探しながら)「壁のせいで部屋に湿気が籠っちゃってんだよ・・・」(シヨウゴ

に)「臭えよな？」

シヨウゴ 「よくわかりませんが・・・」

タクヤ 「完全な無人島だから外の空気が入らねえんだ・・・それで、カビが生えて虫がプ

ラプラプラプラ・・・あ、いた（叩くが捕まえられない。舌打ちをする）「

カレン 「騒がしいわね」

タクヤ （ぶっきらぼうにシヨウゴに）「いた？」

シヨウゴ 「いや・・・」

タクヤ （もう一度舌打ちをして）「病気とか持ってたらどうすんだよ、ここは希望の島
なのにさ・・・」

タクヤは虫を探している。時々パチンと手を叩いては、「ちくしょう」だの呟いている。

上手のドアの前あたりで力一杯叩こうとする。その瞬間アズサが登場。

タクヤ （驚いて）「うわぁ！」（尻餅をつく）

シヨウゴ 「姫様！」

アズサ （特に動じず、そこに立っている）

シヨウゴ 「お怪我はないですか!？」（2人に駆け寄る）

タクヤ （自分が言われたと思い）「あ、俺平気・・・」

シヨウゴ （遮って）（タクヤを押しつけて）「姫様！」

アズサ （無言で部屋の中の状況を見ている。そしてタクヤと目が合う）

タクヤ 「あ、や・・・へへ（苦笑）・・・虫がね、飛んでて・・・」

アズサ 「虫？」

タクヤ 「ええ、なんか・・・すみません、へへ・・・（苦笑）」

アズサ （タクヤは気にせず）「・・・シヨウゴさん、何をしているの?」

シヨウゴ 「え・・・?」

アズサ 「あなたが呼んだのよ。お部屋に来て欲しいって・・・だから来てあげたのよ。な
のにどうしてお部屋にいないの?」

シヨウゴ 「すみません、ただいま・・・」（立とうとする）

アズサ （カレンを見て）「・・・それともなあに? こうやって会ってるって、やっぱり恋
しくなっちゃったの?」

シヨウゴ 「そんなことは・・・」

アズサ （遮って）（蔑むように）「結局あなたも欲望の奴隷なのね・・・」

シヨウゴ 「いえ、そんなことは決してありません!」

アズサ 「・・・そう、わかったわ・・・ほら、それなら行きましょう」（手を取る）

シヨウゴ 「ええ・・あれ、なんか」(握られた手に違和感を感じる)

アズサ 「はい？」

シヨウゴ 「え、なんか泥がついてる・・？」(何となくタクヤを見る)

タクヤ (近づいて)「あれ、本当だ・・(カレンに)おい、タオルかなんか」

カレン 「え・・」(部屋を見回すとハルトが置いて行ったタオルがある)

アズサ 「お外から戻ったばかりなの」

シヨウゴ 「外・・こんな夜に・・？」

カレン 「あのこちら・・」(タオルを手渡す)

アズサ 「ありがとう」

間

カレン 「あのその、どういうことでしょうか・・？」

シヨウゴ (ほぼ同時に)(思い詰めた様子で)「あー！姫様！私は言いましたよ！」

アズサ 「・・え？」

シヨウゴ 「言いました！娘に、あなたに言われた通りハッキリとこの口で！言いました！」

アズサ 「あら、そう」

シヨウゴ 「ええ！私は、私はこの口で、欲望との決別をいたしました！(跪いて)ですから、恋しいなんてのは一切、全くありません！わかってください！あなただけを心から愛しています・・！」(一抹の不安を振り切るようである)

アズサ (シヨウゴの手を取りキスをし)「・・そうなのね、いいことよ。では、行きましょう・・」

シヨウゴの手を取り二人は出て行こうとする。シヨウゴの懺悔をタクヤと顔を見合わせて見ていたカレン。

カレン (我慢できず)「え、ちょっと・・ごめんなさい、全く話が見えなくて・・」

アズサ (振り返って)「はい？」

カレン 「え、あの・・この人とアズサ様がどうして・・・え、呼んだって・・？」

アズサ 「ああ・・・だって生きていくのが不安だって」

カレン 「え？」

アズサ 「1週間ほど前よ。シヨウゴさんがそう言うから。だから慰めてあげたの・・・いつ北の国が国境を超えてくるかも分からないわ。それにあなたと別れること

にもなって・・・つまり、苦しんでいたから」

カレン (飲み込めず) 「はあ・・・」

アズサ 「そうなのよ。でも仕方ないわ・・・それからシヨウゴさんはよく私をお部屋に招くのよ」

カレン (シヨウゴに) 「あなた・・・」

シヨウゴ 「姫様、あの・・・」(早く行きましようの意)

奥で「バン!!」という銃声のような大きな音が聞こえる。続けてサツキの叫び声。

全員 「!?!」

タクヤ 「何!?!」

シヨウゴ (同時に) 「・・・なんだ!?!」

カレン 「ピストルの音だわ・・・!」

シヨウゴ 「銃声か・・・!?!」

カレン 「サツキ様・・・」

シヨウゴは嫌な気がして、下手側のドアから急いで出ていく。

カレン (シヨウゴに) 「あ、ねえ!」

タクヤ (顔面蒼白になり、その場に立ち尽くしている)

間・(短め)

アズサ (タクヤに) 「・・・あなたは行かなくていいの?」

タクヤ 「え?」

アズサ 「あの子の叫び声じゃない」

タクヤ (見られていたことを思い出して) 「え・・・何ですか・・・」

アズサ 「・・・だってあなたの恋人でしょう?」

カレン 「・・・は?」

タクヤはカレンを気にして足早に出て行こうとする。

カレン 「え、何恋人って」

タクヤ 「いや何でも（ねえよ・・・）」

アズサ （遮って）「だってキスしてたから」

カレン 「キス？」

アズサ 「ええ、二人が昨日このお部屋でキスしているのを見たの」

カレン （訳が分かっていないが、タクヤに詰め寄り）「どうゆうこと？」

タクヤ （苛立って癩癩を起こし）「今そんなこといいだろ！ピストルだぞ！」

カレン 「ねえ答えて」（腕を掴む）

タクヤ （腕をぶつきらぼうに振り払って出て行こうとする）

下手側からハルトが入ってくる。

ハルト 「なんの音だ！？サツキ！？」

他 「！？」

ハルト 「サツキか！？（アズサを見とめ）アズサ！無事なのか・・・！」（駆け寄る）

アズサ 「・・・え？」

ハルト （アズサの肩を掴んで）「アズサ・・・よかった・・・！なあ何もない（のか！？）」

ハルトが言い終わる前に、下手のドアから、ユズキを抱いたシヨウゴが入ってくる。ユズキは気を失っているらしい。シヨウゴは手にピストルを持っている。

カレン 「ユズキ！？」（少し駆け寄る）

タクヤ （ほぼ同時）「ユズちゃん・・・？」

シヨウゴはユズキをベッドに寝かせる。

カレン （ユズキに駆け寄り）「打たれたの！？」

シヨウゴ 「ううん（声になっていないが、首を大きく振り）・・・気を失ってるだけ・・・」

（顔面蒼白で震えている）

カレン 「え、どうして・・・？（ピストルを見とめて）・・・それは！？」

シヨウゴ 「・・・これで自殺しようとしたみたい・・・」

カレン 「は・・・」

シヨウゴ 「でも上手くないかなかったんだ・・・」

カレンとシヨウゴが、ユズキの寝ているベッドを囲む。

少ししてサツキが入ってくる。彼女も手にピストルを持っている。

少し離れたところで、アズサが「ふふ・・・」と微笑を浮かべる。それにハルトだけが気づく。

ハルト 「アズサ・・・？」

アズサ 「・・・どうかしましたの・・・？」

ハルト 「・・・今笑わなかったか？」

タクヤ (それを聞き、アズサの方を見る)

間 (短め)

アズサ 「・・・さあ、どうだったでしょう・・・？」 (微笑を浮かべている)

タクヤ (サツキに気付いて) 「あ！」 (近寄るが)

サツキ (それを払い、ハルトらの方を見つめている)

タクヤ 「・・・」

カレン (ベッドに駆け寄り) 「ユズキ・・・！」

シヨウゴ (静止して) 「やめろ、気を失ってるんだ・・・」

カレン 「でも・・・」

シヨウゴ (半分自分に言い聞かせるように) 「怪我とかはないよ・・・音にビックリしただけ

けみたいだから・・・」

ハルト (シヨウゴのセリフに少し被って) (アズサに吸い寄せられるように近づき) 「ア

ズサ、もっと笑ってくれよ、もっと見せてくれ・・・」 (抱きつく)

アズサ 「・・・」

ハルト 「なあ、頼むよ。もっと俺に笑顔を・・・それでお前の背中を見せてくれ、祈らせ

てくれ、頼むよ・・・」 (髪を撫でたり顔に触れたり、そして背中をまさぐり、舞

台端に二人だけの空間を作っていく)

サツキは舞台の端でハルトとアズサの抱き合っているのを見ている。シヨウゴとタクヤも横目でそれを見ている。

シヨウゴ (少しだけ遠いところからベッドに目を移し) 「・・・アレ、でも笑ってる・・・」

タクヤ (ユズキに顔を移し)「え……」

シヨウゴ 「笑ってますよ……」

タクヤ 「……あ、ほんとだ……」

間

サツキ (タクヤにふと後ろから抱きつく)

カレン (それを見て)「!?!」

タクヤ 「!?!? (周りの目を気にして) ちょっと、どうしたの……?」

サツキ 「……ううん、どうもしてない。どうもしてないけど、少しこうしていちやダメ

かしら……?」

タクヤ 「……いや、そんなことないよ……」(サツキの腕を握る)

少しして、タクヤはサツキの方を向き直り抱きしめる。そしてサツキにキス。サツキは少し驚くがそれを受け入れる。

舞台上には二組の抱きついている男女がいる。

カレン (タクヤのハグを呆然と見ていたが、サツキがピストルを持っていることに気づき)「……ねえ、どうしてあなたそれ、持っているの?」

サツキ 「え……いや別にこれは……」(ピストルを机の上に置こうとして、誤ってイ

チゴの皿の中へ)

カレン (イチゴの皿に近づいて)(トゲトゲしく)「こんな物騒なもの、なんで」

サツキ 「……なんでもないのよ。別に意味なんてないの……」

音楽が鳴って、暗転。

〈4場〉翌日。夜。

舞台上のテーブルの上には、またイチゴが山盛りになっているコンポート皿、灰皿、2丁のピストルが一つはイチゴ皿の中、もう一つは灰皿の中に置かれている。

アズサが下手側のベッドの上に座り、タクヤは落ち着かない様子で、フラフラとしている。上手側のベッドの中にユズキが寝ている。

タクヤ 「……喉渴く……」

アズサ 「・・・」

タクヤ 「・・・ジメジメしてんのに、喉渴くって・・・(横目でアズサに) ねえ?・・・へへ(笑)」(イチゴを食べる)

問

タクヤ 「・・・アズサ様・・・中の国からお手紙とか来てないですよね・・・?」

アズサ 「はい?」

タクヤ 「あの、一昨日書簡を出してから、我々にはお返事が来てないのですが・・・ないかないのですか?」

アズサ 「何もないわ」

タクヤ (少しイラついて) 「このまま援軍は送らないつもりでしょか、中立国たって・・・(舌打ち)・・・あの、アズサ様、何か秘密の手紙なども・・・?」

アズサ 「いいえ、全くよ・・・あっちは私みたいな一女(いちおんな)のことなんて、何も思っていないわ・・・手紙なんて寄越さないわよ」

タクヤ 「はあ・・・(独り言のように) でもまあ秘密なら秘密か(笑)」(笑えていない)

アズサ 「・・・別に心配なんてしていないもの・・・」(立ってユズキの方へ)

問

アズサ (顔を見て) 「・・・よく眠ってるのね・・・」

タクヤ 「こいつだけですよ、こんな時に能天気になんか笑ってるのは」

アズサ 「そう・・・」(ユズキの頬に触れる)

タクヤ 「あ・・・」

アズサ 「何?」

タクヤ 「あ、あの、医者から絶対安静と言われてますので・・・」

アズサ 「そう・・・」(優しく触り続ける)

問

タクヤ 「・・・あの・・・やっぱり逃げましょうよ・・・」

アズサ 「え?」

タクヤ 「地下の通路を通って、そこから3日も馬を走らせれば中の国に着きます。私の信頼できる部下何人かでお送りしますので・・・」

アズサ 「いいって言ってるじゃない」

タクヤ 「しかし先ほど国境は落とされまして、北は明後日にでもここに到達します・・・実際の話、ここで北の大軍と戦える備えはございませんよ・・・もう少ししたらこ

こは落ちます」

アズサ 「ええ、さっき聞いたわ」

タクヤ 「・・・はい、ですからその前にアズサ様はここから脱出してもらいたいです」

アズサ (ふとユズキに視線を移す) 「・・・」

タクヤ (答えないので) 「・・・では、私は部下を手配してきます・・・」(出て行くとする)

アズサ (スンと落ち着いて) 「・・・私は逃げないわよ」

タクヤ 「ですが・・・」

アズサ 「逃げないわ・・・」

タクヤ (つい語気が強くなって) 「どうして!?!このままでは捕らえられて殺されま
す!でも、アズサ様が殺される必要は全くもってないのです!」

間 (短め)

アズサ 「・・・私は王妃よ・・・この国に必要とされているもの・・・」

タクヤ 「は・・・(恐れながら)・・・それはハルト様を気にしてのことですか?」

アズサ 「え?」

タクヤ 「お言葉ですが、もうあんな・・・(覚悟を決めて)・・・バカに付き合う必要はあり
ませんよ。もっとご自身を大切に(しなくては・・・)」

アズサ (遮って) 「違うわ」

タクヤ 「違う?」

アズサ 「王妃だもの・・・この国を愛さなくてはいけないわ・・・」

カレンが上手側のドアから入ってくる。手にワインの入ったグラスを一つだけ持っている。

カレン (冷たく) 「・・・これでいいの?」(テーブルの上にグラスを置く)

タクヤ (気まずさを抑えて) 「・・・おう・・・」

タクヤはグラスを持って、壁の方へ。アズサから顔背けるように雨漏りの音を聞く。

タクヤ (一口飲んで大袈裟に) 「カーー渋い・・・!」

カレン 「これしかなかったのよ」

タクヤ 「腐ってんじゃないのか?腐ってるよこれ!」

間

タクヤ (気まずくて)「・・・ま・酒は腐ることはありませんよ・・・っと・・・」(テーブルの上にグラスを置く)

沈黙。タクヤは再び壁の方へ。

カレン 「ねえ・・・？」

タクヤ (反射的に痙攣を起こし)「ああ！？」

間 (短め)

タクヤ 「あ・・・いやごめん・・・」

カレン 「・・・アズサ様、すみませんけど、少し2人にさせていただけますか？」

タクヤ 「いいよ」(否定の意)

カレン (タクヤを睨む)

間

タクヤ (アズサに)「や、大丈夫ですからここ(ベッド)に：俺は、お付きの用意を・・・」

アズサ (ベッドに座って)「いらないうって言ってるわ」

タクヤ 「だから・・・！」(言ってしまったって恐縮する)

沈黙。逃げることもできずに、気まずく立っているタクヤ。

タクヤ (カレンに)「・・・イチゴでも、食べれば・・・？」

カレン (テーブルの方へ向かい、イチゴを一つ食べ、そこにあったピストルを触る)

タクヤ (ドキッとして身構える)

カレン 「・・・どうしてくれるの？それで、これから・・・」

タクヤ 「え、どうって・・・(わざとらしく話をすり替え)・・・だからさ、だから、前も言ったじゃんか、寒いところは人も馬も強えから、1日2日寝なくても平気で動き続けられんだよ」

カレン 「・・・そうじゃなくて」

タクヤ (少し強く)「だから、すぐにでもここに到達するかもしれねえってことだろ？」

間 (短め)

タクヤ 「・・・それに引き換え、俺らはちゃんと寝ないといけねえからな・・・(ワインを

もう一口)カー) (緩和させるようにイチゴを食べる) (気まずい)

カレン 「・・・考えがあるのよ」(ピストルを置く)

タクヤ (少し苛立って) 「・・・何が?」

カレン 「・・・決めた、私たちの関係のことよ・・・」

タクヤ (アズサを気にして) 「だからいいって。今そんな暇ないんだから、国の(危機
なんだから・・・)」

カレン (遮って) 「よくないわよ・・・だって北がここまで到達するんでしょ。だった
ら尚更・・・」

間

カレン 「・・・私、あなたの子供が欲しいわ」

タクヤ 「え?」

カレン 「あの人だけなんてズルよ。私にも子供を作って欲しい」

タクヤ (カレンに近づいて) 「なあ。いま(アズサが) いるから・・・」

カレン 「関係ないわ。(タクヤの至近距離まで近づき) ねえ、作りましょ」

タクヤ 「落ち着けて・・・(距離を取って) なんでそんなこと・・・」

間 (短め)

カレン (アズサに) 「・・・ねえ、どう思います?・・・あのね、私この人が好きなの。ご

存知でしょうけど。この人を愛しているのよ」(徐々に狂気じみて)

タクヤ 「おい!」

カレン (アズサの肩をガツと掴み) 「あなたも女なら分かるはずでしょう?もうこの際

王妃だなんて関係ないわ、一人の女として話してる!」

アズサ (その言葉に過剰に反応し、顔を背け振り払うような素振り)

タクヤ 「やめろ!」(カレンをアズサから引き離そうとする)

カレン 「分かるでしょ!私、裏切られたの!でもこの人の子供が欲しい!」

タクヤ 「おいって!」(引き離す)

カレン (体制を崩し、地面にへたり込む)

タクヤ (思ったより力が入っており) 「あ、や・・・」

間 (短め)

カレン (泣き始めて) 「・・・いいじゃない、一人くらい作ってくれても・・・」

タクヤ (アズサに) 「あの、一回外に・・・」

カレン 「いいわ、ここにいてもらって・・・」

タクヤ (独り言のように)「・・・どっちだよ・・・」

カレン 「・・・あの女とのことは別にいいわ。私も同じで自業自得なもの・・・でもだから、ただ一人の女として子供作って欲しいのよお・・・」(泣いている)

タクヤ 「そんなこと・・・」

カレン (床をバンバンと叩きながら駄々をこねるように)「国が減びるのよ!だったらいいじゃない、子供くらい!ねえ、好きなのよ!」

タクヤ (しゃがんでカレンに近づいて)「おい・・・」

カレン (そのままタクヤを押し倒す)「・・・セックスしましょ・・・!」

そのまま床の上で、カレンはタクヤの上に馬乗りになり、服を脱ごうとする。それをかろうじてタクヤは止めるが、次にカレンは暴力的にタクヤのシャツのボタンを一つずつ外す。タクヤは抵抗するが、うまく行かない。カレンはボタンを外す最中にタクヤにキスをしたり顔を撫でたりする。タクヤは抵抗する。アズサは少し立って、距離のあるところからそれを見むように見ている。

上手のドアから静かにサツキが入ってきていることに気づかない。サツキは2人を見ていたが、アズサがいることに気づき、睨むような表情になる。

タクヤ 「やめろって!」(カレンを突き飛ばして、部屋の隅まで逃げる)

カレン (息が上がっている)

タクヤ (サツキに気づき)「・・・あ・・・」

サツキ (タクヤと目を合わせて、蔑んだような目でみて踵を返す)

タクヤ 「あ、ねえ!待って!待って!待って!」(サツキの手を掴む)

サツキとタクヤは手を繋いだまま、その場で沈黙。

タクヤ 「・・・いや、あの、今の事故だから・・・」

サツキ 「・・・」

カレン 「いや(違う)!!」

タクヤ (遮るように大きな声で)「今のは事故だからあ!完全に、そんな、アレ、何でもねえから・・・」(ボタンをぎこちなく片手で直す)

サツキ 「・・・そう」(どこかアズサを睨んでいる様子)

間（短め）

サツキ 「離してよ」

タクヤ 「え・・・（一瞬離しかけるが、もう一度両手で掴むが）え、嫌だ」

サツキ 「・・・」

タクヤ 「だって昨日俺ら・・・（カレンを見て）え、だって、違うから・・・」（手を掴んだまま、ドアを塞ぐように回り込む）

サツキ （手を軽く振るい、部屋の中央の方へ）

タクヤ （弱々しく）「・・・事故だし・・・」

サツキ、テーブルの上のピストルに手を触れる。そして、アズサを見つめる。

アズサ 「・・・どうかしたの？」

サツキ 「・・・うん、別に」（ピストルから手を離し、ゆっくりイチゴを一つ食べる）

アズサ 「あら、そう」

間（短め）

サツキ 「・・・雨が強くなってるわね」

タクヤ 「え？」

サツキ （壁の方へ歩いて）「ほら、昨日より早くなってる。タンタンタンって・・・」

タクヤ 「・・・確かに言われてみれば」

サツキ （アズサに）「聞こえる？タンタンタン・・・」

アズサ 「・・・」

サツキ （カレンに）「ねえ、あなたは聞こえるでしょう？」

カレン （顔を上げて）「・・・え・・・や、私は、麻痺、しちゃってるから・・・」

サツキ 「麻痺？」

カレン 「え、ええ・・・何も聞こえない・・・」

間（短め）

サツキ 「・・・それに赤い月が大きくなった。昨日より全然」

タクヤ 「え、月・・・外出たの？」

サツキ 「報告聞いてたから馬の足音かと思ったのよ。そんなわけないのにね・・・このまま大きくなって赤い満月になったら、きっとこの世界を飲み込んでしまうほどになるわ・・・」

問

サツキ (アズサに) 「・・・ねえ、あなたは怖くないの？」

アズサ 「なにが？」

サツキ 「・・・この、だから、この世界で起きる色々なことよ」

アズサ 「・・・いいえ、何も怖くないわ」

サツキ 「・・・」

アズサ 「私は、ただこの国の人々を愛して愛されるだけだもの」

サツキ (蔑んだ目で見つめて) 「・・・そう」

問

サツキ (タクヤに) 「雨が止むって言ったの、あなた、嘘っぱちじゃない」

タクヤ 「え・・・だってまだだよそれは」

サツキ 「お酒なんか飲んじゃって・・・」(グラスを手に持って、少し飲む)

タクヤ 「おい・・・」

サツキ (すぐに灰皿の中に吐き出す) 「・・・渋い・・・！」

タクヤ (少し笑ってしまう)

サツキ 「なにこれ？腐ってんじゃないの？」

タクヤ 「いやそうなんだよ(笑)」

サツキ 「唇ピリピリする(小さな笑い)」

タクヤ (強く咎めるわけでもなく) 「・・・な、なあ、やめとけよ。お酒とか、悪いよ」

(軽くサツキのお腹を指さす)

サツキ 「え・・・(お腹を見て)・・・そうね」

問

タクヤ (軽くカレンを見る、カレンが項垂れているので、サツキに少し近づき) 「・・・

なあ、あのさ、俺やっぱお前のこと好きだよ・・・」

サツキ 「・・・は？」

タクヤ 「や、いやらしい意味じゃなくて・・・うん、だから愛してるっつか、お前だけ

を。そうゆう気持ちだよ」

サツキ 「そう・・・」

問(短め)

タクヤ 「・・・あ、お前だけっていうか、その子だって、うん、俺は愛してるっていうか。

だから一緒に育てていきたいって、思ってるからさ」

サツキ 「・・・こんな国の中で？」

タクヤ 「そうだよ・・・(アズサをチラッと見て)・・・何なら逃げたっていいさ。どっか田舎の方に行つて、小屋かなんか小さいの建ててさ。それで3人で生きてこうじゃない。(イチゴを指して) ほら、イチゴ育てて、農業、俺やるし。ね？そうやって慎ましく生きてくんだよ」(徐々に壮大な構想のように)

間(短め)

サツキ 「・・・そんなのいらわないわ」

タクヤ 「え？」

サツキ 「どうせそれも嘘よ。そんな生活、つまらないでしょう。お酒飲んでタバコ吸つて・・・私のことなんて見なくなるもの」

タクヤ 「・・・そんなことねえよ」

サツキ 「いいの・・・あなたなんて必要ないのよ」

タクヤ (焦りなのか苛立ちなのか) 「なに言つてんだよ・・・え、そしたらその子供はどうすんだよ・・・」

サツキ 「・・・」

タクヤ 「俺の子だよ！俺とお前の・・・その、愛の子供だよ！」

サツキ 「違うわ。この子は私のお腹の中にいるの・・・あなたは一回思い違いさせただけ。

あなたに関係ないじゃない・・・」

タクヤ 「思い違いって、だって昨日・・・」

サツキ (遮るように) 「・・・じゃあ撃てる？」

タクヤ 「へ？」

サツキ (タクヤにピストルを握らせる) 「これであの女を撃ち殺してちょうだいよ」

タクヤ 「え・・・」(ピストル片手にアズサを見る)

アズサ (タクヤを見つめる)

タクヤ 「え・・・なんで？」

サツキ 「私のこと愛してるんですしょ？だったらできるはずよ」(タクヤの後ろに周り、両手を持ってピストルを構えさせ、ジリジリとアズサの方へ押ししていく)

タクヤ 「・・・ちよつと何でよ・・・は、アズサ様・・・？」

アズサ (タクヤから顔を背ける)

サツキ (押ししていくと、銃口とアズサとの距離がすごく近くなる) 「・・・ほら(トリガ

ーに)手をかけて、ほら」

タクヤ (後ろのサツキを見ながら)「え・(アズサの方に目を向けると想像以上に距離が近く)うわあ!ちよっと待って!待って!」

サツキ (タクヤの手の上からトリガーの押そうとして)「撃つのよ!」

タクヤ (抵抗して)「いやちよっと!無理!意味わかんないって!ねえ!」(力づくでサツキの腕を解き、ピストルを床に置き、アズサを見て両手を上げる)

間(短め)

タクヤ 「・・・何だよ、撃つとか・・・」

サツキ (軽く笑ってピストルを拾う)「・・・できないならあなた、それだけなのね・・・」

(部屋から出て行こうとするが、ユズキのベッドが目に入り近づく)

タクヤ (言葉が見つからず)「・・・」

サツキ (覗き込んでユズキに)「・・・可哀想に・・・」(少しの間、見つめる)

間(短め)

カレン (突然サツキの足にしがみつき)「だったら私にちよっだい!!」

サツキ (驚き)「きゃっ・・・!」

カレン (狂ったように)「この人のこと知らないんでしょ!?その子ごと私にちよっだいよ!」

サツキ 「や、ちよっとなに?!」

タクヤ (ほぼ同時)「ちよっとおい・・・!」

カレン 「いいじゃない!ねえ、あなたはハルト様に拒絶されて、この国はもう終わるんだから!だったらその子にも意味はないわよ!ね!ね!」

タクヤ (小さく)「ハルト・・・?」

サツキ (大勢を崩しそうになりながら)「離して・・・!」

カレン 「いらぬならちよっだいよ!全部私にもらってあげるわ!」

サツキは掴まれた足を起点に前に倒れる。咄嗟にお腹を押さえ、ピストルが床に落ちる

タクヤ (駆け寄って)「ああ・・・」(サツキのお腹に触れようとする)

サツキ (その手を力強く払う)

タクヤ 「・・・」(尻餅をつく)

間

サツキ (2人に)「・・・この子は私の子よ」

カレン (四つん這いで近づいて) 「だからそれを私に(ちょうだいって・・・!)」

サツキ (お腹を守るようにして) 「誰にもあげないわ!この子は私のものなの!」

カレン (サツキを掴んで) 「そんなのズルイじゃない!何だよ!」

サツキ 「誰にも渡さない!この子がいないとダメだもの!私の未来、私の恋のための子
だわ!」

サツキはカレンを暴力的に振り払い立つ。尻餅をつく二人をサツキは上から見下す。そして、ピストルを拾う。カレンとタクヤは「ヒッ」といった声にならないような小さな声をあげる。サツキはテーブルに向かい、イチゴを一つ食べ、そして部屋から出ていく。ピストルは持ったまま、それをじっと見ていたタクヤ。サツキが出ていくと、カレンをチラッと一瞥してから、サツキを追いかけるように出ていく。カレンはその場にうずくまっている。

アズサ (ベッドからゆっくり立ってカレンに近づく)

カレン (それに気づかない)

アズサ (カレンの頭を撫でる)

カレン 「!?」(ビクツとして、後ずさる)

アズサ (優しく) 「・・・可哀想に、あなた・・・」

カレン 「・・・なんですか・・・」

アズサ 「ひどいわね、あんなの。私ひどいと思った、あの二人・・・私ピストル突きつけられたわ・・・」

カレン 「・・・」

アズサ 「・・・でもね、恋なんて所詮そんなものじゃない。ねえ、虚しくて苦しいもの
わ。国が減びて、大勢人が死んで、それでたち消えてしまうもの・・・」

カレン 「え・・・」(顔を上げる)

アズサ (カレンの傍にしゃがみ、深くキスをする)

間

カレン (アズサを呆然と見つめる)

アズサ 「・・・もうあなたは苦しまなくていいのよ。私が愛してあげるもの。だからあな
たも私を愛して。あんな男のことなんて忘れるの」

カレン (徐々に息が荒くなって) 「・・・アズサ様・・・」

アズサ (カレンの頬を触りながら、優しく笑いかけ) 「ね、子供だって、この子だって

そうよ。ふふ・・・欲望は意味がないの。こんな世界に生き続けることだって苦しみに繋がってるもの、全部いらないわ・・・そんなものを超えた高みにいきましよう・・・」

カレン 「・・・高み・・・」

アズサ 「そうよ・・・(両手を握り)・・・だから私に祈って。ね。祈るの・・・私はあなたを愛するわ・・・」

沈黙。カレンはじっとアズサを見ている。アズサは微笑みかけている。

カレン (突然えもいわれぬ嫌悪感に襲われ手を振り払い立って、アズサと距離を取り、ビクつきながら) 「・・・な、何ですかそれ・・・」

アズサ (微笑を浮かべて) 「・・・どうしたの・・・?」

カレン 「・・・え、な、何それ・・・気持ち悪い・・・」

アズサ (立って、カレンに近づく)

カレン 「来ないで!来ないでください・・・!」

アズサ 「・・・どうして?あなた苦しんでるじゃない・・・」

カレン (辿々しく) 「苦しんでないわよ、私・・・」

アズサ 「・・・」(さらに近づく)

カレン (離れ) 「・・・私苦しんでない全然、やめてください・・・だって、私だって、今でもあの人のことが好きだもの・・・!」

アズサ 「・・・え?」

カレン (少し語気強く) 「・・・あなたがこれを苦しみだって言うなら違うわ・・・私あの人にまだ恋をしてるの・・・!」

アズサ 「こんな国でそんなの必要ないじゃない?」(徐々に冷たい目になる)

カレン 「違う、必要よ!・・・だって、女は、恋のために生きてるんだから!私女よ!

私恋に生きてるの・・・!」

アズサ 「・・・」(少し弱々しい表情で近づく)

カレン 「だから来ないでって・・・!」

2人は距離をとって目を合わせ、相手の出方を伺っているような沈黙。少しして下手側からショウゴが入ってくる。

カレン 「!？」

シヨウゴ (部屋の中の状況を見て)「・・・え・・・」

2人 「・・・」

シヨウゴ (怯えたように)「・・・え、姫様・・・？」

アズサ 「・・・」

間

カレン (涙を拭きながら)「・・・いや・・・」(クッションを戻す)

シヨウゴ 「・・・え・・・あの、ユズキどう？」

カレン 「・・・え、ああ・・・」

シヨウゴ 「起きない・・・？」

カレン 「・・・起きてないわ・・・」

シヨウゴ 「そう・・・」(アズサを気にしながらユズキのベッドの方へ)

間

シヨウゴ 「・・・まだ寝てるんだな・・・」

カレン 「・・・ええ」

シヨウゴ (ユズキの髪を撫でて)「・・・少しも動いたりもしてないのか？」

カレン 「全くよ・・・」

シヨウゴ 「そうか・・・」(後悔するように、ベッドの傍にしゃがむ)

間(短め)

カレン 「・・・あなた、話し合いはもう終わったの？」

シヨウゴ 「ああ、さっきな」(アズサを気にしている)

カレン 「そうなのね」

シヨウゴ 「・・・あのな・・・打って出ることになったよ。ここから出て戦うって・・・それで、俺・・・最初に出ていくことになった」(悔いるように)

カレン 「・・・え」

シヨウゴ 「・・・雨も明日後日で止むらしいからな。それが止んだら戦いに出るんだ・・・へへ、もう押し付け合いだよ・・・」(乾いた笑い)

カレン 「・・・」

シヨウゴ 「・・・だからさ、だから、すぐこいつ(ユズキ)の顔見に来ただけど・・・起きねえな・・・」

カレン 「そうね・・・」

シヨウゴ (振り返って、カレンをジッとみる)

カレン 「なによ」

シヨウゴ 「いや、なんでもない・・・」

カレン 「・・・激しい戦争になるのね・・・」

シヨウゴ 「激しくなるかね。なんせ逃げ出してるやつだって沢山いるんだから。今となりやあっちはうちの10倍だよ・・・」

カレン 「そう・・・」

シヨウゴ (アズサをチラッと見るが) 「・・・手、貸してくれないか・・・?」

カレン 「え・・・」

カレンはよくわからないが手を差し出す。シヨウゴはそれを掴みキスをしようとする。それに気づき、手を引っ込める。

シヨウゴ (悲しげな苦笑) 「・・・じゃあ、起きたら呼んでくれよ。俺、隣いるから」

カレン 「え、なんで・・・」

シヨウゴ 「だってさ・・・俺がいたってどうしようもないだろ」

カレン (アズサを気にして) 「・・・いやよ、ここにいてちょうだい・・・」

間

シヨウゴ 「・・・ここなんか喉渴くね・・・」

カレン 「え・・・」

シヨウゴ 「うん・・・ジメジメしてんに・・・」

カレン 「気のせいじゃない?」

シヨウゴ (小首を傾げ) 「・・・なんかイガラっぽい・・・」(少ししてイチゴを見つけ、イチゴに吸い寄せられるように近づく)

シヨウゴは震える手でイチゴを一つ手に取り、じつくりと眺め、覚悟を決めて一口で食べる。ゆっくりと味わい、ゆっくりと嚥下する。

カレン 「・・・美味しい?(笑)」

シヨウゴ 「え・・・」

カレン 「ずいぶん美味しそうに食べるから・・・(笑)」

シヨウゴ 「え、いや・・・(苦笑)」

間 (短め)

アズサ 「・・・シヨウゴさん」

シヨウゴ (過剰にビクついて) 「・・・はい？」

アズサ 「あなた、戦いに出るのね・・・」

シヨウゴ 「・・・え、ええ」

アズサ 「ねえシヨウゴさん・・・この後、私のお部屋いらっしゃらない？・・・お背中、見せてあげるわよ・・・」(近づく)

カレン 「・・・背中・・・？」

シヨウゴ (同時に)(顔を背け) 「・・・やめてください・・・」

間 (短め)

アズサ 「ねえ、この子を心配してるの・・・？」

シヨウゴ 「・・・はい」

アズサ 「この子なんていらなくなって言ったのに。そうだったでしょう？・・・(シヨウゴに近づき手を掴み)・・・ねえ、あなたは私に祈ってほしいのよ」

シヨウゴ (一歩引いて) 「・・・」

アズサ 「私はこんなにあなたを愛してるわ、こんなに・・・だから来て、ね？新しい愛の世界に連れていくわ・・・」

シヨウゴ (少し強く)(顔を背け) 「やめてください・・・！」

カレン (突然大きな声で) 「あ、ユズキ！」

カレンの目線の先でユズキが動く。

シヨウゴ 「え、ユズキ！」(手を振り払い、ベッドに駆け寄る)

カレン 「ユズキ・・・！？」(ベッドに駆け寄る)

そこには、ユズキがゆっくりと体を起越している、目の焦点が合っていないが、次第に意識が戻り、自分の両手を見る。そして、ベッドを囲んでいる二人の親を見とめ、そしてその奥にいるアズサを見とめる。短い時間だが、部屋を見回し、現状を理解する。

ユズキ 「・・・アズサ様・・・私、私、生きてしまいました。申し訳ありません・・・」

カレン (ユズキを支えて) 「ユズキ、どうしたの!？」

アズサ 「・・・」

ユズキ (カレンは無視して) 「折角、折角、アズサ様が、私を苦しみからときほなつてくれたのに・・・私こんなにあっているのに・・・私、死ねなかった・・・アズサ様! 私、私なんて、死ねない私・・・!」

アズサ 「・・・あら、そう」

ユズキ (ベッドからずり落ち、アズサの足元に向い) 「ごめんなさいアズサ様・・・! 私あなたを本当に愛してる・・・ねえアズサ様、お背中に祈らせてくれませんか!? お背中に・・・見せてください! 私祈らせてくれないと私・・・ねえアズサ様、お背中を・・・!」 (アズサの腰に抱きつく)

アズサ 「・・・」 (見下すような形でユズキを見る)

ユズキ (アズサの胴体を登るような形で) 「お願いします! 私お背中見ないと、祈らせてもらわないと・・・(アズサの上着を剥ぎ) 私ちゃんと死にますから! ね! だからその前にお背中を! 愛してますから! アズサ様愛してます! (テーブルの上のピストルを見て) 今度はちゃんと死ぬから・・・!」

ユズキ、テーブルの上のピストルを手取る。それに気づいたシヨウゴは素早く、ユズキからピストルを取り上げ、投げ捨ててそして、ユズキを抱きしめる。

シヨウゴ 「・・・もうやめろ・・・もうやめてくれよ・・・!」

ユズキ (狂っているように) 「・・・ピストルが・・・ピストル私・・・」 (ピストルを探す)
シヨウゴ (さらに強く抱きしめて) 「・・・やめてくれ・・・俺が悪かった、ユズキ・・・俺が。」

ごめんよ、ごめんユズキ・・・」

ユズキ 「・・・アズサ様・・・私、ピストル」

アズサ 「・・・」 (微笑が消えている)

シヨウゴ 「ユズキ、死ぬなんて言わないでくれ。お願いだよ、頼むから・・・そんなことしないでくれよユズキ・・・!」

ユズキ 「・・・」 (徐々に発作のような症状が収まる)

カレン (二人に近づき) 「・・・ユズキ、大丈夫なの・・・」

ユズキ 「・・・」

シヨウゴ (カレンも抱き寄せて) 「お前も、すまなかった・・・な、申し訳ない・・・俺、やっぱお前が大切・・・大切なんだよ・・・すまなかった、ごめんよ・・・」

カレン 「・・・あなた・・・」

シヨウゴ 「俺、ほんとに怖かったんだよ・・・ユズキが自殺しようとして、怖かった・・・ごめんよ本当に・・・もう一回3人でやり直してえよ・・・俺、お前たちが大切だよ・・・」

3人の家族が抱き合っている。それを冷たい目でアズサが見ている。

カレン (情の籠った感じで) 「少し痛いわ・・・」

シヨウゴ (さらに強く抱きしめ) 「ごめんよ・・・もしさ、もし俺が帰って来たら、今度こそ3人で暮らしてくれよ・・・暮らそう3人で・・・な・・・な・・・」

ユズキ (ようやく顔を上げ) 「・・・パパ・・・」

間

アズサ 「・・・どうしてよ。どうしてそんなこと言うの、シヨウゴさん・・・」 (狂気に満ちた表情)

シヨウゴ (抱くのを辞め、アズサの方に視線を向ける) 「・・・」

アズサ (語気強く) 「・・・愛してくれるんじゃないの? 欲望だらけのこんな世界捨ててしまっ、私だけをただ愛し続けるって誓ってくれたじゃない」

シヨウゴ 「・・・すみません。やっぱり俺、家族が大切なんですよ・・・あなたのためには死ねないんです・・・!」

アズサ 「ひどいわ! 愛の世界で私だけを永遠に愛してくれるって言ったのに! こんな世界も欲望も全部いららないのよ。なんでそれがわからないの!??」

シヨウゴ 「撤回します! 申し訳ありません!・・・しかし私はこの世界で、だたこの二人だけを心から愛しているのです! わかってください・・・!」

アズサ 「いいわ! そしたらここで見せてあげる。あなたは私を愛してるのよ! だから今すぐ・・・」 (羽織物を脱ぐ)

シヨウゴ (アズサを掴んで止めて) 「おやめください!」

アズサ 「離しなさい!」

シヨウゴ (掴んだまま) (カレンに) 「カレン、誰か呼んできてくれ!」

カレン 「え・・・」

シヨウゴ 「早く! 頼む! 誰かを!」

カレン (ユズキの手を取る)

ユズキ (しゃがんだまま動こうとしない)

カレン (訳が分かっていないが)「ユズキ！」(無理やり引きづるように)

ユズキはシヨウゴとアズサを見つめたまま動かない。シヨウゴとアズサは抱き合うような形で攻防を続けている。カレンは動かないユズキを見かねて、この状況を誰かに伝えるにいくのか下手のドアから出ていく。アズサはシヨウゴを振り払う。

アズサ (自分のワンピースドレスのボタンに手をかける)

シヨウゴ (大きな声で)「もうやめましょう姫様！」

アズサ 「・・・」

シヨウゴ 「・・・苦しんだっていいじゃないですか！こんな世界で生きようとしたっていいじゃないですか！大切にしたいものがあるんですよ、俺・・・この世界で俺らが、もがきながら、必死に生きてたっていいじゃないですか！」

カレンが戻ってくる。

カレン 「火事よ！」

シヨウゴ 「え・・・!？」

カレン 「ねえ！燃えているの！奥の宿舎が！今」

シヨウゴ 「燃えてるって・・・」

カレン 「だから、宿舎に火が上がってるのよ！廊下から見える宿舎よ！」

シヨウゴ 「は・・・どうして・・・」

カレン 「わからない！でも北の軍じゃないと思うわ。なにも音がしないもの」

シヨウゴが焦って向うとすると、それより早くアズサがカレンの脇から出て行こうとする。羽織物は床に落ちたまま。

カレン 「え、アズサ(様・・・?)」

カレンのセリフを遮るように、ハルトが血相を上手側のドアから入ってくる。

ハルト 「やっぱりここにいたのか！」

アズサとカレン 「!？」

ハルト 「おい、なんでこんな所にいるんだ！俺の部屋に来てくれ！」（詰め寄る）

アズサ 「……」

ハルト 「お前も聞いただろ、国境が落とされたんだ！これから北がここまでなだれ込んでくる！……なあ、どうすればいい！」

アズサ （ハルトから距離を取り、羽織物を拾う）

シヨウゴは火事を見るため出ていく。ドアが少し開けっぱなし。

ハルト 「……アズサ、俺はどうすれば……早く、俺の部屋に……！」

アズサ （シヨウゴの出て行った火の方に行こうとして）「……」

ハルト 「……おい、なんで何も言わない！いつもお前が、お前の笑顔と刺青が教えてくれたじゃないか……教えてくれよ。どうすればいい！」

アズサ 「……」（羽織物を着る）

ハルト 「なんで着てしまうんだ……！」（アズサに近寄ろうとして、しゃがみこんでいるユズキに足が引っ掛かり転ぶ）

カレン 「あ……！」（ハルトではなくユズキを心配して駆け寄る）

問

ハルト （アズサの足元で）「……答えてくれアズサ……国は負けるのか……？そしたら俺はどうするんだ……俺はお前を愛してるぞ……なあ、俺はここで殺されるのか……？」

アズサ 「……」

ハルト （アズサの足を掴んで）「……なあ、俺にお前の愛の世界を教えてくださいよ……だから、俺の部屋に来てくれアズサ……」

アズサ （ようやく）「……行って、どうするの？」

ハルト 「……え……（アズサの顔に向け）……抱かせてくれないか……？」

アズサ （それを聞いて、嫌悪に満ちた表情になり、足を一步引く）

ハルト （抱きしめ）「……これが最後っていうなら、お前を……」

遮るように上手側のドアからタクヤが入ってくる。

タクヤ 「火事だぞ・・・！」

ハルト (振り返って) 「は・・・？」

タクヤ (ハルトに気づき) 「!?・・・だから宿舎が燃えてまして・・・西の方の」

カレン (知っているので) 「ええ・・・」

タクヤ (ユズキに気づき、寄り) 「あ、ユズちゃん・・・？」

ユズキ (顔を上げる)

タクヤ (ユズキに触れながら) (カレンに) 「生き返ったの？」

カレン 「生き返ったって・・・」

ハルト (同時に) (タクヤに) 「北か!？」

タクヤ 「いやどうか・・・しかし(そんな音は・・・)」

ハルト (遮って) 「アズサ、ついに北が来てしまったぞ！」

アズサ 「・・・」

ハルト (動転して) 「すぐそこまで来てしまった!なあ、どうすりゃいいんだ!」(そこから上がっていくような形で、素早くアズサの羽織物を脱がせ、ドレスを脱がせていく)

アズサ (ボタンが二つくらい開けられた時にハルトの手を掴み) 「・・・その火に飛び

込みなさい・・・」※

ハルト 「え・・・」

アズサ 「敵に殺される前に死ぬのよ。私を心から愛しながら・・・そしたら私を永遠に愛し続けることになるわ・・・」

ハルト 「・・・俺、死ぬのか・・・？」

アズサ 「私を愛しているんでしょう?それならそうしなさい・・・ハルト様ならしてくれませんか?」

ハルト (あまり理解できておらずためらいながら) 「・・・お、おう・・・」

ハルトは離れる。※辺りで下手のドアからサツキがピストルを持って入ってくる。

サツキ (塞ぎ) 「待って!!」

他 (サツキの方を向く) 「!?」

タクヤ (ずっと探してたので)「・・・あ！」

サツキ 「行かないで・・・！」(ハルトに近づく)

タクヤ 「・・・お前どこにいたたんよ、俺ずっと探してて・・・」

サツキ (タクヤは無視し)(恋人のようにハルトの腕を掴み)「嫌よ、行ってしまったら。私生きてられられない・・・！」

ハルト (サツキを振り払う)

サツキ、振り返り、アズサの前まで歩いていき、目の前にピストルを突き立てる。

アズサ 「!？」

ハルト (銃口を掴み、下げ)「お前何してるんだ！」

サツキ 「離して！」

ハルト 「おい！お前！」(ハルトとサツキがピストルを取り合う)

タクヤ 「サツキ?!」

サツキ 「離してよ！」

ハルト 「それをよこせ！おい！」

タクヤ 「サツキ、なあ！」(駆け寄る)

タクヤはピストルを奪う。

サツキ 「兄様!!」(ハルトに抱きつく)

ハルト (抵抗して)「・・・離せ・・・」

サツキ (ハルトの顔をグッと掴みキスをする)

それをみていたタクヤは言葉にならない大きな声を上げ、ハルトの腕を掴み隣室へ連れて行くこうとする。サツキはハルトにしがみついている。3人もみ合いながら、隣室へ・・・少しの間、揉み合っている声が聞こえるが、一瞬静かになり、その後「パーン！」と大きな音が聞こえる。カレンは思わず、耳をふさぐ。しばらくの静寂のあと、サツキが入ってくる。

サツキ (呆然と虚空を見ている)「・・・」

カレン 「……え……」

サツキ 「……」

カレン (蚊の鳴く声で)「え……何が……ピストルは……?」

ドアからタクヤが入ってくる。手にはピストルを持っており、手と服に血がついている。
カレンの叫び声。沈黙。

タクヤ 「……」

カレン 「……タクヤさん……え……え……なに……?」

タクヤ 「……俺が撃ったんだよ……」

カレン 「へ……」

タクヤ 「俺が撃ったんだ、あのバカを……撃ち殺してやった……へへ……」(乾いた

笑い)

サツキ (ハルトの傍にしゃがみ込む)

カレン 「え、タクヤさん……何をやって……サツキ様……?」

サツキ 「……」

タクヤ (机の脇にうずくまる)

ハルトが打たれたとされる方を静かに眺めていたアズサだったが、スッとテーブルの方へ歩いていき、イチゴを1つ2つ手に取る。

カレン 「……え」

アズサはそこで中腰になり、テーブルの上でイチゴを潰し、果汁が滴る。その表情は怒りと悲しみがない混ぜになっている。その光景は、グロテスクでもあり、また神聖で美しいようにも思える。

アズサ (絞り終わった果実を投げ捨て)(タクヤに)「……西かしら?」

タクヤ 「……はい?」

アズサ 「その宿舎、火が上がっているの」

タクヤ 「は……え、ええ、はい……」

アズサは上手のドアから出て行こうとする。
その後ろ手をユズキが掴み、強く引っ張り、アズサの首を絞めようとする。アズサは逃げようとするが、ユズキは彼女をベッドに押さえつけ、馬乗りになり、首を絞める。アズサは小さな悲鳴を上げる。

アズサ (足を軽くバタつかせながら、うめき声を上げる)

ユズキ 「……」(無表情でアズサの首を絞めていく)

カレン 「……ユズキ……」(咎めるわけでもなく、ただただ見つめている)

他の誰も止めることはしない。

少しして、アズサはグツタリする。それを見て、ユズキは手を離す。

ユズキは立って、イチゴを一つ掴む。

カレン 「ねえ……」

ユズキは無視して出ていく。カレンは、タクヤを少し見たあと、それを追いかけて出ていく。
長い沈黙。

サツキは先ほどアズサが放った潰れたイチゴの方へ、動物のように這っていき、拾い上げ食べる。それを見ているタクヤ。

再び長い沈黙。

ふと、部屋を壁を触りながら円を描くように歩く。

タクヤ 「……あのな、ここは無人島なんだよ……」

サツキ 「……」

タクヤ (サツキに話しかけるように) 「絶望の海の中で孤立した唯一の希望なんだ・火も使い果たしちゃった・(皿に目を向けるイチゴがもう一つしかない。それを食べる)・食料も今、今この瞬間食い尽くしちゃった・でも大丈夫だ。また少ししたら、うん、少なくとも来年になれば、この希望の木は新しい食料をつけるんだ……」

サツキ 「……そう……」

タクヤ (ワイングラスを掴んで)「おい、サツキ。湖だ。水だぞ。希望の水だ！(一口飲んで)カー！まずい！……一口いる？」

サツキ (イチゴで髪を濡れたハルトをゆっくりと眺めて)「……いただくわ……」(グラスを受け取り、一口飲んで、渋い顔をする)

タクヤ 「……へへ……(笑)」

下手側のドアから血相を変えたシヨウゴが入ってくる。

シヨウゴ (倒れたアズサを見とめて)「うわっ……」

タクヤ 「……へへ……」

シヨウゴ 「……タクヤ様……？」

タクヤ 「……あのな、俺らの命を替かしてた熊はもう死んじまったぞ！(手をピストルの形にして)俺がな、撃ち殺したんだ……」

シヨウゴ 「……はあ……」(死体を見ている)

タクヤ 「俺がちゃんと仕留めてやった……だからな、俺らは生きていけるぞ！絶望の海の中でずっと生きていけるんだ……生きていけるってことは、生きていけるってことだからな……」

間

タクヤ (床に座り、空を見上げ、シヨウゴに)「……なあ、星が綺麗だな……」

シヨウゴ (空を見上げ)「……そうっすね……」

サツキ (タクヤに)「ねえ……」

タクヤ 「……ん？」

サツキ (お腹を押さえ)「……今、少し動いた気がするわ……」

タクヤ 「え……いや、まだ早えだろ……(笑)」

サツキ 「そうかしら……」(小さく笑う)

タクヤ 「気のせいだよ(笑)」

間(短め)

タクヤ 「……でも、生きていかなきゃなんねえな……へへ(笑)」

3人は顔を見合わせて小さく笑う。暗転。完。